久留米・うきは工業用地造成事業関係埋蔵文化財調査報告

鷹取ヒゲジロ遺跡

福岡県久留米市田主丸町所在遺跡の調査

２０１９

九州歴史資料館

久留米・うきは工業用地造成事業関係埋蔵文化財調査報告

鷹取ヒゲジロ遺跡

福岡県久留米市田主丸町所在遺跡の調査

２０１９

九州歴史資料館

鷹取ヒゲジロ遺跡遠景（南上空から）

序

本報告書は、久留米・うきは工業用地造成事業に伴い、平成28・29年度にかけて行った福岡県久留米市田主丸町鷹取に所在する鷹取ヒゲジロ遺跡の発掘調査の記録です。

鷹取ヒゲジロ遺跡は、筑後川の支流である巨瀬川左岸で、古代の竹野郡の時代以来残されている広大な条里遺構の中にあり、立地自体に耳納山麓の歴史的な地勢が息づいていると言えます。更に今回の発掘調査では、その時代を遡る弥生時代の中頃から古墳時代の集落を中心とした遺跡が確認されました。また、本調査に至る前の約33haもの広大な事業地の試掘・確認調査も併せて、現況からは把握し難い巨勢川に隣接した遺跡の存在・様相が把握されたことにより、今後の新たな遺跡の発見も想定される成果となりました。

本報告書が教育、学術ともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、福岡県企業局や地元の久留米市教育委員会、久留米市企業誘致推進課をはじめとした関係諸機関や多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに深く感謝いたします。

平成31年3月31日

九州歴史資料館

館長　杉光誠

例　言

1. 本書は、久留米・うきは工業用地造成事業に伴い、平成 28 年度から平成 29 年度にかけて九州歴史資料館が発掘調査をした鷹取ヒゲジロ遺跡の調査報告書である。

2. 発掘調査及び報告書作成は福岡県企業局からの委託を受けて、九州歴史資料館が実施した。

3. 本書に掲載した遺構写真の撮影は坂本真一・坂元雄紀・梶佐古幸謙が行い、遺物写真の撮影は北岡伸一（文化財調査室）が行った。空中写真撮影は、東亜航空技研株式会社に撮影を委託した。

4. 本書に掲載した遺構図の作成は坂本・坂元・梶佐古・伊崎俊秋・吉村靖徳が行い、遺物実測図は坂元・梶佐古と整理作業員が作成した。

5. 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館において、小川泰樹の指導の下に実施した。

6. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

7. 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の電子地形図 1/25,000「田主丸」を改変したものである。本書で使用した方位は座標北である。

8. 本書の執筆は坂元・梶佐古が行い、編集は梶佐古が行った。

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 1
1．調査に至る経緯 …… 1
2．調査・整理の組織 …… 2
Ⅱ．遺跡の位置と歴史的環境 …… 4
Ⅲ．発掘調査の記録 …… 9
1．調査対象地全体の概要 …… 9
1　調査の経過 …… 9
2　調査区全体の概要（遺構番号の整理） …… 10
2．1区の調査 …… 13
1　1区の概要 …… 13
2　遺構と遺物 …… 13
(1) 土坑 …… 13
(2) 溝 …… 15
3　1区小結 …… 15
3．2区の調査 …… 16
1　2区の概要 …… 16
2　遺構と遺物 …… 16
(1) 土坑 …… 16
(2) 溝 …… 20
(3) その他の出土土器類 …… 23
3　2区小結 …… 25
4．3区の調査 …… 26
1　3区の概要 …… 26
2　遺構と遺物 …… 26
(1) 土坑 …… 26
(2) 溝 …… 35
(3) その他の出土土器類 …… 37
3　3区小結 …… 37
5．4区の調査 …… 38
1　4区の概要 …… 38
2　遺構と遺物 …… 38
(1) 竪穴住居跡 …… 38
(2) 溝 …… 41
(3) その他の出土土器類 …… 44
3　4区小結 …… 44
6．5区の調査 …… 44
1　5区の概要 …… 44
2　遺構と遺物 …… 47

(1) 竪穴住居跡 …… 47
(2) 掘立柱建物跡 …… 47
(3) 溝 …… 48
3 5区小結 …… 50
7. 6区の調査 …… 53
1 6区の概要 …… 53
2 遺構と遺物 …… 53
(1) 竪穴住居跡 …… 53
(2) 土坑 …… 54
(3) 溝 …… 54
(4) その他の出土土器類 …… 57
3 6区小結 …… 57
8. 出土石器・土製品及びその他の地点出土陶磁器 …… 58
Ⅳ. まとめ …… 64

図版目次

巻頭図版　鷹取ヒゲジロ遺跡遠景（南上空から）
図版1　1. 1区遠景（東上空から）　2. 1区全景（上が北）
図版2　1. 1区1号土坑（南から）　2. 1区2号土坑（南から）
3. 1区3号土坑（南東から）
図版3　1. 1区1号溝（東から）　2. 1区1号溝土層（東から）
3. 1区2号溝土層（西から）
図版4　1. 2区－1全景（上が北）　2. 2区－2全景及び1･4･7号溝(西から)
図版5　1. 2区－3全景（上が北）　2. 2区　4号土坑（南から）
図版6　1. 2区－1　5号土坑（東から）　2. 2区－1　6号土坑（南から）
3. 2区－1　6号土坑土層（南から）
図版7　1. 2区－1遠景（南西上空から）　2. 2区－2　1・4号溝土層（北西から）
3. 2区－3　1号溝土層（西から）　4. 2区－1　1号溝土層（西から）
図版8　1. 2区－1　2号溝土層①（北から）　2. 2区－1　2号溝土層②（南から）
3. 2区－1　3号溝土層①（南東から）　4. 2区－1　3号溝土層②（南東から）
図版9　1. 2区－2　4号溝土層（西から）　2. 2区－3　4号溝土層（東から）
3. 2区－3　5号溝土層（南から）　4. 2区－3　5号溝土器出土状況(東から)
図版10　1. 2区－3　6号溝土層（西から）　2. 2区－2　7号溝土層（南西から）
3. 2区－1　8号溝土層北（西から）　4. 2区－1　8号溝土層中央（西から）
5. 2区－1　8号溝土層南（西から）
図版11　1. 3区遠景（南上空から）　2. 3区全景（上が東）
図版12　1. 3区　7号土坑（南から）　2. 3区　8号土坑（西から）
3. 3区　9号土坑（西から）
図版13　1. 3区　10号土坑（北から）　2. 3区　11号土坑（東から）

3. 3区　11号土坑土層（東から）　4. 3区　12号土坑半裁状況（南から）
図版14　1. 3区　13号土坑（西から）　2. 3区　14号土坑（北から）
3. 3区　15号土坑（西から）
図版15　1. 3区　16号土坑（西から）　2. 3区　17号土坑（北から）
3. 3区　18号土坑（西から）
図版16　1. 3区　19号土坑（南西から）　2. 3区　20号土坑（西から）
3. 3区　21号土坑（南から）
図版17　1. 3区　東側土坑群（上が西）　2. 3区　東側土坑群西トレンチ東壁土層（西から）
3. 3区　東側土坑群東トレンチ東壁土層（西から）
4. 3区　9号溝西端小礫出土状況（東から）
図版18　1. 4区－2・3全景（上が東）　2. 4区－1西側及び3号溝（北から）
3. 4区－1西側及び3号溝（北東から）
図版19　1. 4区－2　1号竪穴住居跡(北東から）　2. 4区－2　1号竪穴住居跡屋内土坑(北から）
3. 4区－2　2号竪穴住居跡（北から）
図版20　1. 4区－1　3号溝土層①（南東から）　2. 4区－1　3号溝②（南東から）
3. 4区－2・3　10～14号溝（上が東）
図版21　1. 4区－3　11号溝土層①（南東から）　2. 4区－2　11号溝土層②（南東から）
3. 4区－3　12号溝土層（北から）　4. 4区－3　13・14号溝土層（南東から）
図版22　1. 5区－1全景（上が北）　2. 5区－2全景（上が北）
図版23　1. 5区－1　3号竪穴住居跡(南から）　2. 5区－1　3号竪穴住居跡炉跡検出状況(南から）
3. 5区－1　1号掘立柱建物跡（西から）
図版24　1. 5区－1　8・15～17号溝（上が北）　2. 5区－2　1・18号溝（上が北）
3. 5区－2　1号溝土層（東から）　4. 5区－1　8号溝土層南半（東から）
5. 5区－1　8号溝土層北半（東から）
図版25　1. 5区－1　15号溝土層（東から）　2. 5区－1　16号溝土層（東から）
3. 5区－1　17号溝土層（西から）　4. 5区－1　18号溝土層（西から）
図版26　1. 6区遠景（南上空から）　2. 6区全景（上が北）
3. 6区　各遺構遠景（北西上空から）
図版27　1. 6区　4号竪穴住居跡（東から）　2. 6区　22号土坑（北から）
3. 6区　22号土坑土層（南から）
図版28　1. 6区　19号溝土層（西から）　2. 6区　20号溝土層（西から）
3. 6区　21号溝土層（西から）　4. 6区　22号溝土層（東から）
5. 6区　23号溝土層（東から）
図版29　1. 6区　24号溝土層（南から）　2. 6区　25号溝土層（東から）
3. 6区　26号溝土層（西から）　4. 6区　27号溝土層（北から）
5. 6区　28号溝土層（南西から）
図版30　出土土器類①
図版31　出土土器類②
図版32　出土石器①～④

挿図目次

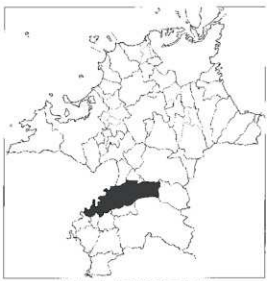
第１図　久留米市の位置 …… 1
第２図　周辺遺跡分布図（1/20,000） …… 5
第３図　久留米・うきは工業団地造成事業地周辺地形図（1/5,000） …… 8
第４図　鷹取ヒゲジロ遺跡調査区位置図（1/2,000） …… 11
第５図　１区遺構配置図（1/250） …… 13
第６図　１区１～３号土坑実測図及び１・２号溝土層実測図（土坑は 1/30、溝は 1/40） …… 14
第７図　２区遺構配置図（1/300） …… 17・18
第８図　２区４～６号土坑実測図（1/30） …… 19
第９図　２区１～３号溝土層実測図（1/40） …… 21
第 10 図　２区４～８号溝土層実測図（８号のみ 1/80、他は 1/40） …… 24
第 11 図　３区遺構配置図（1/250） …… 27・28
第 12 図　３区７～９号土坑実測図（1/30） …… 29
第 13 図　３区 10 ～ 13 号土坑実測図（10・11 号は 1/40、他は 1/30） …… 30
第 14 図　３区 14 ～ 18 号土坑実測図（1/40） …… 32
第 15 図　３区 19 ～ 21 号土坑実測図（21 号のみ 1/30、他は 1/40） …… 34
第 16 図　３区中央部土坑群断面、東側土坑群トレンチ土層及び９号溝土層実測図（９号溝のみ 1/40、他は 1/80） …… 36
第 17 図　４区遺構配置図（1/250） …… 39・40
第 18 図　４区１・２号竪穴住居跡実測図（1/60） …… 41
第 19 図　４区３・10 ～ 14 号溝土層実測図（1/40） …… 42
第 20 図　５区遺構配置図（1/300） …… 45・46
第 21 図　５区３号竪穴住居跡実測図（1/60） …… 47
第 22 図　５区１号掘立柱建物跡実測図（1/60） …… 48
第 23 図　５区１・８・15 ～ 18 号溝土層実測図（８号溝のみ 1/80、他は 1/40） …… 49
第 24 図　６区遺構配置図（1/300） …… 51・52
第 25 図　６区４号竪穴住居跡実測図及び 22 号土坑実測図（住居跡は 1/60、土坑は 1/30） 53
第 26 図　６区 19 ～ 28 号溝土層実測図（1/40） …… 56
第 27 図　１・２区出土土器類実測図（18・19 は 1/4、他は 1/3） …… 59
第 28 図　３～５区出土土器類実測図（13・23 ～ 26 は 1/4、他は 1/3） …… 60
第 29 図　６区及びその他の地点出土土器類実測図（12・13 は 1/4、他は 1/3） …… 61
第 30 図　石器及び土製品実測図（１～７・11 は 2/3、他は 1/2） …… 62
第 31 図　鷹取ヒゲジロ遺跡竪穴住居跡及び溝分布図（1/2,000） …… 65

表目次

第１表　鷹取ヒゲジロ遺跡遺構番号対照表 …… 12

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経緯



第１図　久留米市の位置

福岡県全域で工業用地に不足感が生じていることを受けて、久留米市の吉木工業団地、うきは市の富永工業団地との中間で両市にまたがる位置に、久留米・うきは工業用地の造成が計画された。久留米市域約 21ha、うきは市域約 12ha の計約 33ha の広さで、福岡県企業局（以下、県企業局）により、平成 28 年度中より一部着工を始め、平成 31 年度末に施工完了とする計画であった。

福岡県主体の事業である一方で、地元での関連する各種準備、調整等を各市の担当部局が行っていた。平成 27 年末頃の事業計画が一般には非公表の段階において、久留米市内部での事業計画の情報を受けた久留米市文化財保護課（以下、市文化財保護課）では、事業規模に対して事業期間が短い一方で、埋蔵文化財に関して未調整であったことから、早期の調整を要するものと認識した。福岡県文化財保護課（以下、県文化財保護課）では、市文化財保護課から情報を受け、県企業局と連絡を取り、県と各市それぞれの事業部局と文化財部局の全体が会する調整の場が必要との認識で合意した。

年が明けて平成 28 年 1 月に県、久留米市、うきは市の文化財部局及び企業誘致部局の関連する担当者が会し、福岡県庁にて関係諸機関による初の文化財調査に関する協議が行われた。文化財保護部局では、工業用地造成事業自体の詳細内容や今後の工程を把握するとともに、開発に先立つ埋蔵文化財保護に関する枠組みや今後の事業工程と連動した文化財側として必要な各種手続き・措置についての説明を行った。これにより、県、各市の事業部局と文化財保護部局にとって、以降の各立場からの業務進捗に当たっての必要事項について、一定の共通認識の前提が整ったと言える。平成 28 年 3 月に県議会での承認を経て、事業認可されたことにより、本格的に事業として動き出す状況となった。平成 28 年度となり、4 月初旬に県、久留米市、うきは市の文化財部局が会し、久留米市田主丸出張所での協議及び事業地の確認を行い、今後の用地取得状況に応じた調整や試掘の進め方について協議を行った。各市が主体となりつつ、県や九州歴史資料館が必要に応じた支援等を行うことを申し合わせた。

以降、平成 28 年度の前半にかけて、事業用地の取得が進められた。また、文化財保護や埋蔵文化財についての法規や各種基準・要項等、それらに基づいた各種手続きに関する調整が県企業局と県文化財保護課の間で進められた。事業用地の取得がまとまった 9 月段階から、久留米市、うきは市の各市が試掘・確認調査に着手した。なお、より広域な久留米市側では、市文化財保護課と九州歴史資料館とで調査対象地の分担を行い、協力体制で確認調査に当たった。うきは市側では、9 月 16 日から 9 月 29 日にかけて試掘調査が実施され、事業対象地全域で基盤層が低く、地形が落ち込んでいると考えられる様相で、遺構は確認されなかった。一方で、久留米市側では 9 月 15 日から 10 月 15 日にかけて確認調査が実施され、複数の地点で遺構が確認された。久留米市の 21ha の事業地に対して、本調査を実際に進める中で再度確認を要する範囲を含めて、約 5ha が遺構の分布する可能性が高い範囲という判断となった。上記の調査結果を受けて、12 月 26 日に福岡県庁において、

県企業局、県文化財保護課、久留米市企業誘致推進課、市文化財保護課が会して、今後の本発掘調査と工事の施工内容・スケジュールとの具体的な整合を図るための協議が行われた。用地造成の内容から、調査範囲を絞ることが困難という判断となったため、上記の約 5ha の中で本調査を実際に要する範囲を全て調査対象とすることとなった。また、調査主体については、市文化財保護課が複数の他事業の対応で繁忙のため、九州歴史資料館が対応することとなった。先行して水路の施工を行う可能性がある地点があり、平成 28 年度の 2 月にその地点を皮切りに本調査を進めていくことが決まった。以降、県企業局から市文化財保護課へ文化財保護法 94 条に基づく発掘届が提出され、文書手続きが進められるとともに、調査費用の予算措置として事業受託・協定に関する事務手続きも執られ、本調査の準備が進められた。そのような要件が整い、2 月 1 日より約 1 年後の平成 29 年度末の終了を目標として本調査が開始された。なお、当初約 5ha が調査対象の可能性が高い範囲と設定されていたが、本調査を実施しながら、より広い面での遺構確認を再度バックホーで行っていく中で、遺構に近似したものでも、人為的な痕跡から除外した範囲を調査対象地から除外することによって、最終的な調査面積は 19,624㎡となった。

2　調査・整理の組織

平成 28・29 年度の発掘調査と平成 30 年度の整理・報告に関わる関係者は次のとおりである。

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
福岡県企業局			
企業管理者	江口勝	家守嘉明	家守嘉明
局長	阿部俊郎	阿部俊郎	久木田 祐次
管理課長	江渕勝彦	江渕勝彦	垰本 潔
企画開発係長	津留克史	白鳥伸一	白鳥伸一
事務主査	大熊雄貴	大熊雄貴	黒木健二
	歌野 聡		
福岡県教育委員会			
教育長	城戸秀明	城戸秀明	城戸秀明
教育次長	西牟田 龍治	吉田法稔	
副教育長			吉田法稔
総務部長	辰田一郎	辰田一郎	
教育総務部長			辰田一郎
九州歴史資料館			
館長	杉光 誠	杉光 誠	杉光 誠
副館長	飛野博文	飛野博文	東 良
総務室長	塩塚孝憲	田嶋朋子	
総務班長	中村満喜子	中村満喜子	中村満喜子
事務主査	西村知子	林田朋子	林田朋子
主任主事	原野貴生	原野貴生	原野貴生

	秦 健太	秦 健太	
文化財調査室長	吉村靖徳	吉村靖徳	吉村靖徳
文化財調査室長補佐	伊﨑俊秋	伊﨑俊秋	伊﨑俊秋
文化財調査班長	秦 憲二	秦 憲二	森井啓次
参事補佐	小川泰樹	小川泰樹	小川泰樹（整理）
技術主査	坂本真一（調査）	坂元雄紀（調査）	坂元雄紀（報告）
技師		梶佐古 幸謙（調査）	梶佐古 幸謙（報告）

発掘調査にあたっては、発掘作業員の方々を始め、福岡県企業局及び久留米市文化財保護課や多くの方々のご協力によって、円滑かつ無事に調査を終了することができました。ここに記して感謝いたします。

調査区から南方耳納連山を望む

事業地内久大本線を走る「ななつ星 in 九州」

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境

1. 地理的環境

鷹取ヒゲジロ遺跡は、福岡県久留米市田主丸町に所在する。田主丸町は旧浮羽郡田主丸町が、平成17年（2005年）に旧三井郡北野町、旧三潴郡城島町・三潴町とともに久留米市に合併・編入されることで現在の行政区域となった。田主丸町は久留米市の東端部に位置し、東西に細長く、北は朝倉市、東はうきは市、南は八女市（上陽町・星野村）と隣接している。

鷹取ヒゲジロ遺跡が立地する田主丸町は、「筑紫次郎」と称される筑後川が形成した、肥沃な筑後平野に位置する。筑後川は日本三大暴れ川のうちの一つであり、古来より氾濫を繰り返すと同時に、一大穀倉地帯である筑後平野一帯を潤してきた。この筑後川を境にして、その下流域では左岸を筑後平野、右岸を佐賀平野という。背振山系と耳納山系の間の平野部分はくびれており、このくびれ部を境に上流側を両筑平野、下流側を南筑平野という。両筑平野は平面形態が二等片三角形をしており、特にうきは・日田側に向かうにつれて、平野が徐々に閉じていく。このうち両筑平野は、耳納山地・三郡山地の断層崖下に発達した扇状地と筑後川支流の沖積平野からなる。この耳納山地は、高良山・発心山・鷹取山から構成される、標高700～800mの山系であり、正面から見ると屏風のような形をしていることから「一大屏風山地」と例えられる。耳納山地の北縁に見られる断層崖は、日本を外帯と内帯に分ける、いわゆる中央構造線に沿っていると考えられている。今回調査した鷹取ヒゲジロ遺跡は、耳納山地北麓の小河川群によって形成された扇状地の先端部に位置している。

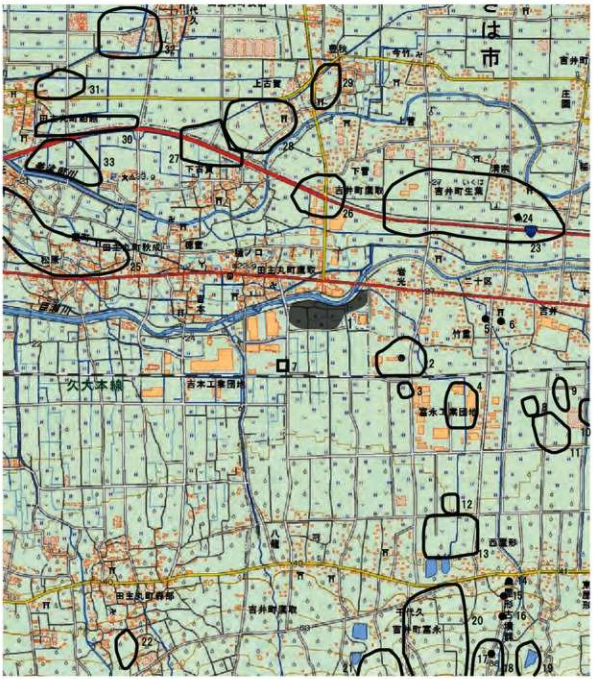
また、遺跡のすぐ北側には筑後川の支流である巨瀬川が筑後川と並行して東西に流れている。この巨瀬川と筑後川の堆積作用によって、田主丸地域には東西方向に点在する自然堤防が形成されている。鷹取ヒゲジロ遺跡は、この自然堤防の背後の地形的にやや低くなった場所に位置しており、遺跡の背後には雄大な耳納山地がそびえたつということになる。

鷹取ヒゲジロ遺跡周辺の地層は、完新世に形成された沖積地層であり、小河川が耳納山地を開析して形成した河川堆積物である礫・砂・泥を基盤とする。本遺跡の基盤層（いわゆる地山）は黄褐色～茶褐色の砂質土が主体であり、これを切り込んで遺構が形成される場合が、基本となる。

2. 歴史的環境

久留米市田主丸町及びうきは市では、国道210号浮羽バイパス建設事業や圃場整備等に係る埋蔵文化財発掘調査で多くの重要な成果が上がっている。これらの成果は各報告書に明るいので、詳細はそちらを参照されたい。したがって、ここでは今回報告する縄文時代から中世にかけての鷹取ヒゲジロ遺跡周辺に絞って調査例を概観してみたい。

まず、旧石器時代の遺跡については当該地域では確認されておらず、水縄山麓にて旧石器が採集されているのみである。次に縄文時代については、竹重遺跡において縄文時代前期頃の土坑などの遺構が確認されている。また、耳納山麓北側の扇状地所在の法華原遺跡をはじめ、山麓各所で早期から晩期の土器や石器等が採集されている。長栖地区遺跡群では、溝などから縄文時代後期後葉～晩期後半の土器が出土している。他にも、三春大碇遺跡、柳瀬遺跡、若宮外屋敷遺跡などで縄文時代後期の竪穴住居跡等が、千代久遺跡では縄文時代晩期の土器が検出されており、当該地域の縄文時代の生活の実態が明らかになりつつある。一方、縄文時代晩期後半～末（弥生時代早期）の夜臼式期の集落は皆無であり、縄文時代晩期後半頃には集落が一旦途絶えることとなる。したがって、



1 鷹取ヒゲジロ遺跡　2 竹重遺跡　3 富永正地遺跡　4 富永下佛正遺跡　5 前方後円墳？
6 徳永古墳　7 鷹取一条遺跡　8 富永横枕遺跡　9 吉井穀蘇遺跡　10 吉井大手木遺跡
11 富永西小敷遺跡　12 富永上佛正遺跡　13 富永遺跡群　14 珍敷塚古墳　15 原古墳
16 鳥船塚古墳　17 古畑古墳　18 古畑遺跡　19 東屋形古墳群　20 法華原遺跡
21 烏越遺跡　22 森部 B 遺跡　23 生葉地区遺跡群　24 生葉 1 号墳　25 秋成遺跡
26 鷹取五反田遺跡　27 力常遺跡　28 長栖遺跡群　29 豊秋遺跡　30 船越二ノ上遺跡
31 船越一ノ上遺跡　32 千代久遺跡　33 船越宮ノ前遺跡

第 2 図　周辺遺跡分布図（1/20,000）

縄文時代晩期後半から弥生時代前期の間に空白期が存在することとなる。

弥生時代前期の遺跡の事例は少ないが、水分遺跡第７次調査のSK597・700や竹重遺跡３号住居跡などから前期後半～末頃の土器が出土しており、集落での生活の痕跡が残る。弥生時代中期の代表的な集落遺跡としては、弥生時代中期後半の住居跡や甕棺墓群が検出された船越一ノ上遺跡をはじめ、同じく弥生時代中期の集落・甕棺墓群が検出された鷹取五反田遺跡、仁右衛門畑遺跡、塚堂遺跡、秋成遺跡など多数の遺跡があげられる。これらの弥生時代の集落はほとんどの場合、微高地上ないしは筑後川支流が形成した自然堤防上に立地している。当時の生活環境として、安定した基盤であるこれらの立地が適当だったのだろう。弥生時代後期では、いわゆる水分台地に形成された水分遺跡から弥生時代の住居や二重区画溝が検出され、弥生時代中期から６～８世紀にかけての有機的な集落構成・集落の変遷が明らかになっている。このように田主丸町では、弥生時代中期から集落の進出が始まり、前期前半頃の集落は皆無である。また、注目される点としては、大規模な首長級の墳墓が存在しないということが挙げられる。鷹取五反田遺跡や船越一ノ上遺跡では、中期の甕棺が多数検出されているが、弥生時代中期以降、時代が下るにつれ、墓域における首長の存在が明瞭になることはなく古墳時代を迎える。

古墳時代では塚堂遺跡、仁右衛門畑遺跡、堂畑遺跡、鷹取五反田遺跡など前期から中期の大規模な集落・土器群が調査されている。これらの遺跡では、カマド付住居が大量に検出されており、普及期のカマドとして注目される。これらの遺跡をはじめ、竹重遺跡や富永正地遺跡などでは、畿内系土器・外来系土器が検出されており、当時の地域間交流の一端をうかがうことができる。これらの遺跡群は、月岡古墳、日岡古墳、珍塚古墳、屋形古墳群など、前方後円墳や顕著な地域の特色である装飾古墳を含め、当該地域に数多く築造された古墳群と合わせて、古墳時代における社会構造や地域同士の関係を明らかにするうえで重要な位置づけにあると言える。また、鷹取ヒゲジロ遺跡のすぐ南東側の竹重遺跡では、古墳時代開始期の前方後方墳と考えられる竹重１号墳が調査されている。中期末から後期前半には、一時期集落が衰退し、古墳時代後期になると、船越二ノ上遺跡、船越宮ノ前遺跡、船越高原Ａ遺跡、鷹取五反田遺跡、仁右衛門畑遺跡、堂畑遺跡などが新たに展開する集落として挙げられる。また、耳納山麓には古墳時代後期に属する群集墳が多数分布しており、『筑後国史（筑後将士軍談）』によると、幕末には1000基以上の古墳が存在していた事実が記載されている。これら古墳群の中で田主丸町の古墳時代後期を象徴するのが、田主丸大塚古墳である。当古墳は、近年の発掘調査の成果によって、全長103mの当該期では最大級の前方後円墳であることが判明した。

古代の遺跡としては、堂畑遺跡や仁右衛門畑遺跡、船越二ノ上遺跡、船越宮ノ前遺跡、船越高原遺跡、鷹取五反田遺跡などで集落跡が調査されている。旧筑後国内には、筑後国府や高良山神籠石、小郡官衙遺跡、下高橋官衙遺跡などが存在し、当該期における筑後地域の重要性がうかがえる。また、耳納山麓一帯には条理地割が現在も残存している箇所があり、その延長は20数kmにも及び、律令期の風景の一端を現在も残していると言えよう。1999年に刊行された『田主丸町遺跡等詳細分布調査報告書』では、この条理地割が残る区画を「条理制遺跡」として位置付けており、1999年段階で鷹取ヒゲジロ遺跡もこの範囲に含まれていることがわかる。このように古代においては条里制による土地開発が進行し、上記の集落群は土地開発と関連して展開したものであると推測できる。

中世では長栖地区遺跡群の長栖西の前遺跡で、11～12世紀の庇付きの掘立柱建物跡と建物を区画する溝が検出されており、当時の屋敷範囲を示すものとして重要な成果である。

十世紀に成立した『倭名類聚抄』によると、筑後国は 10 郡からなり、田主丸町は概ね竹野郡にあたり、この竹野郡は柴刈郷、二田郷、竹野郷、長栖郷、船越郷、川会郷の六郷からなる。鷹取ヒゲジロ遺跡は竹野郡長栖郷と生葉郡のちょうど郡境にあたる部分に立地する。

以上、鷹取ヒゲジロ遺跡周辺の歴史的環境を概観した。本遺跡は巨瀬川が形成した自然堤防の背後に立地し、本地域の弥生・古墳時代の遺跡の立地条件と共通している。

参考文献

生野里美編 2013『長栖地区遺跡群』うきは市文化財調査報告書第 17 集　うきは市教育委員会

今井凉子編 2003『大的遺跡Ⅰ・日詰遺跡Ⅰ』一般国道 210 号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第 19 集

江島尚子編 1997『富永正地遺跡～遺物編～』吉井町文化財調査報告書第 9 集　吉井町教育委員会

江島伸彦編 2000『船越高原遺跡』田主丸町文化財調査報告書第 13 集　田主丸町教育委員会

小澤佳憲編 2005『日詰遺跡Ⅱ』一般国道 210 号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第 22 集

岸本圭編 2004『竹野小学校遺跡』福岡県文化財調査報告書第 188 集　福岡県教育委員会

岸本圭編 2008『竹重遺跡 2』福岡県文化財調査報告書第 217 集　福岡県教育委員会

熊代昌之編 2015『水分遺跡 - 第 7 次調査遺物編 -』久留米市文化財調査報告書第 355　久留米市教育委員会

齋部麻矢編 2010『竹重遺跡 3』福岡県文化財調査報告書第 227 集　福岡県教育委員会

重藤輝行編 2002『堂畑遺跡Ⅰ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第 17 集　福岡県教育委員会

寺嶋克史編 2004『柳瀬遺跡（下層編）』浮羽町文化財調査報告書第 18 集　浮羽町教育委員会

寺嶋克史編 2006『若宮外屋敷遺跡』うきは市文化財調査報告書第 1 集　うきは市教育委員会

寺嶋克史編 2009『三春大碇遺跡Ⅰ』うきは市文化財調査報告書第 7 集　うきは市教育委員会

秀嶋龍男編 1993『千代久遺跡Ⅰ』田主丸町文化財調査報告書第 3 集　田主丸町教育委員会

馬田弘稔編 1983『塚堂遺跡Ⅰ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第 1 集　福岡県教育委員会

丸林禎彦編 1999『田主丸町遺跡等詳細分布調査報告書』田主丸町文化財調査報告書第 12 集　田主丸町教育委員会

水ノ江和同編 1998『鷹取五反田遺跡Ⅰ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第 9 集　福岡県教育委員会

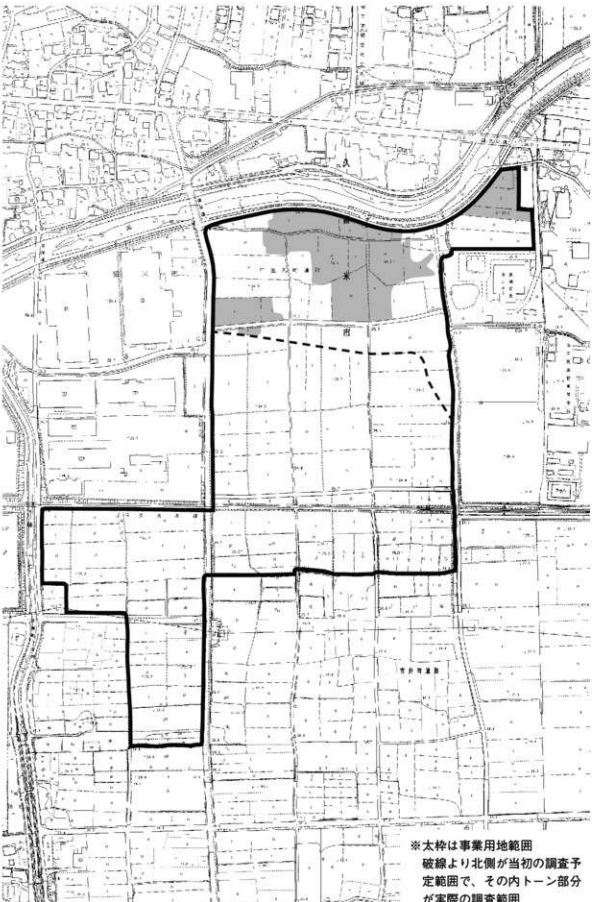
水ノ江和同編 1999『鷹取五反田遺跡Ⅱ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第 10 集　福岡県教育委員会

森井啓次編 2000『竹重遺跡』福岡県文化財調査報告書第 147 集　福岡県教育委員会

吉田東明編 1999『船越二ノ上遺跡』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第 11 集　福岡県教育委員会

吉田東明編 2000『仁右衛門畑遺跡Ⅰ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第 12 集　福岡県教育委員会

吉田東明編 2001『仁右衛門畑遺跡Ⅱ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第 13 集　福岡県教育委員会



第３図　久留米・うきは工業用地造成事業周辺地形図（1/5,000）

Ⅲ　発掘調査の記録

1.　調査地全体の概要

1　調査の経過

1区の調査　平成29年2月1日より重機を搬入し、表土剥ぎを開始した。1区及び2区は先行して水路の施工を行う箇所に当たるため、いち早く重機による表土剥ぎにとりかかった。重機による表土剥ぎの終了後、順次人力による遺構検出・掘削を開始した。安定面は茶褐色の砂質土を基調としており、掘削は順調に進んだ。当調査区では、溝や土坑、ピットを検出したが、遺構・遺物ともに遺存状況はよくなかった。3月14日までに、掘削、記録作業、空撮すべての工程を終えた。

2区の調査　1区の調査終了後、2区北側の遺構検出、掘削に取りかかった。その結果、南北や東西に流れる溝、ピットなどを検出し、順次掘削を行った。平成28年度の調査は2区北側の掘削で終了した。前年度に既に重機による表土剥ぎを行っていたため、平成29年度の4月12日より人力による2区－1の掘削を開始した。前年度調査の確認も含め、北側から順次遺構検出・掘削作業を行っていった。その結果、南北東西に流れる溝、ピットなどを再確認し、南側にも溝などの遺構が広がることを確認した。地山が黄褐色砂質土であり、遺構埋土との差が明瞭だったため、作業は順調に進み、掘削・記録作業は5月11日に終了した。8月21日より2区－2の遺構検出・掘削作業を行った。当調査区は、茶褐色砂質土が地山であり、作業はかなり捗った。検出の結果、溝2条が交差しながら切り合った状態で検出された。遺物の出土量はやはり少なかった。9月6日からは2区－3北側の調査にとりかかった。遺構検出の結果、溝2条が交差しながら切り合った状態が確認された。うち1条の地山からは土師器がまとまって出土した。これらの溝は、調査区を東西に流れる大溝によって大きく削られていた。9月28日から2区－3南側の遺構検出・掘削にとりかかった。溝3条、大溝、ピット多数を検出し、2区1および2区－2に続くと思われる溝を確認した。遺物の遺存状況はよくなかった。10月5日には掘削・記録作業が終了した。空撮は、年をまたいだ1月19日に行った。

3区の調査　2区の調査と同時並行で重機による表土剥ぎを行っていたため、4月27日から人力による検出・掘削を開始した。3区西側半分の調査区は、プランが不明瞭で埋土が黒色粘質土である土坑が多数検出されたが、切り合い関係がほとんどなく検出は容易であった。しかし、遺物がほとんど出土せず、遺構の掘削時期や埋没時期が不明瞭なまま調査を進めた。また、当初3区の東側半分の調査区に関しては、遺構面が全面黒色であり、遺構の切り合いなども見られないことから谷地形に埋没した土であると判断して調査を進めていた。しかし、調査区西側に検出された土坑群が過去に粘土を採掘する目的で掘削されたものである可能性が考えられたため、再度調査区東側の検出を行った結果、地山が島状に残っていることがわかり、谷地形埋没土としていた埋土は遺構埋土である可能性が高まった。そのため、黒色土が検出された範囲に南北方向の3本のトレンチを設定し、地山・埋土の状況を確認した。その結果、東側半分の黒色土は無数の不整形な土坑の切り合いだということが判明したが、平面でのプランの検出はできなかった。この東側半分の遺構群については、すべてを完掘することはできなかったが、切り合い関係・埋土の埋没状況がわかるように土層を記録した。6月から7月にかけての梅雨による大雨や台風、九州北部豪雨などによって調査区は水没を繰り返し、粘土質の基盤層や埋土も相まって調査は困難を極めたが、8月1日にはすべての掘削と記録作業を終了した。8月4日に空撮を行い3区の調査を終了した。

4区の調査　3区の調査と同時並行で、6月9日より4区－1の遺構検出・掘削を開始した。4区も地山が黄褐色砂質土であり、遺構の検出は容易であった。4区－1からは溝とピットが検出された。溝は適宜ベルトを設けながら掘削し、土層の記録を取っていった。6月14日に4区－3の掘削・記録すべての作業が終了し、全体写真の撮影を行った。7月31日より4区－2の遺構検出・掘削を行った。遺構の検出は容易であったものの、例年に無い暑さにより作業の進行は芳しくなかった。東側から順次検出を行い、溝や土坑、ピットなどを検出できた。8月30日には4区－2の掘削・記録作業を終了した。8月10日より4区－3の遺構検出・掘削を行った。日差しが最もきつくなる時期であり、作業の進行は芳しくなかったが、西側より順次遺構検出を行った。当調査区では、竪穴住居跡2棟、大溝、溝、ピットなどを検出することができた。随時1/20の個別遺構図を作成しながら、掘削作業を進めていった。9月28日までに掘削・記録作業を終了し、10月12日に空撮を行った。

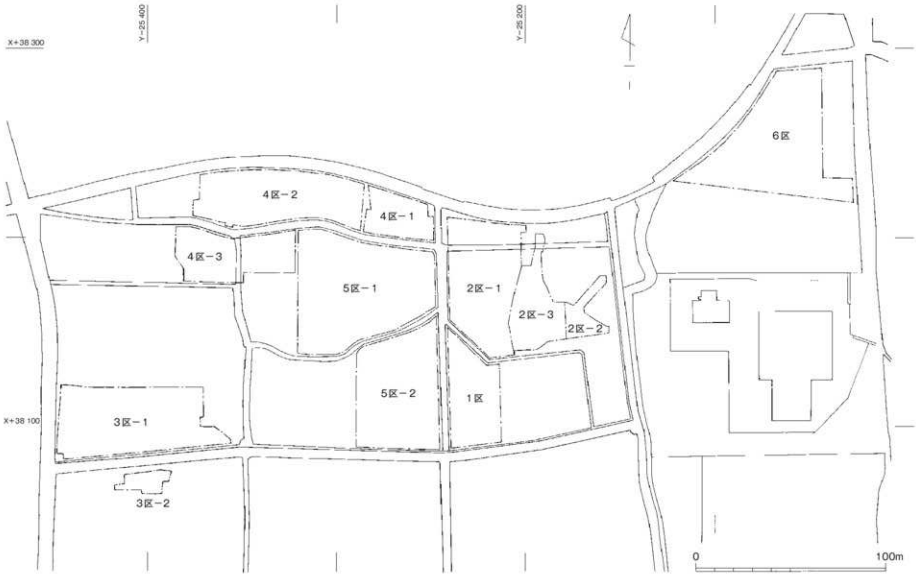
5区の調査　10月12日より5区－1の調査を開始した。当調査区は黄褐色～茶褐色砂質土の地山に黒褐色埋土の遺構が切り込むというものだった。地山が砂質土であったため、遺構検出と掘削作業は捗り、竪穴建物跡、大溝、溝、ピット、掘立柱建物跡などを検出することができた。また、当調査区では、南側に風倒木が多数検出された。これが人為によるものか自然の営為によるものかは判然としない。11月20日までに掘削・記録作業を終了し、11月27日に空撮が完了した。

11月27日より、5区－2の遺構検出を開始した。検出の結果、溝2条、ピット、風倒木などを検出した。溝は5区－1から続く溝と、1区から続く溝が確認された。遺構・遺物ともに少なかったので、作業は順調に進み12月13日に掘削を完了した。空撮は年をまたいだ1月19日に行った。

6区の調査　1月16日より調査区東端部にあたる6区の調査を開始した。表土剥ぎの結果、調査区北東部の200㎡程が台地状になっていることがわかった。台地と台地下遺構検出面の比高差は60～70cmである。この台地状地形はもともと個人所有の畑地であり、後世の大幅な削平を免れていたものと推定される。したがって、この台地状地形は周囲の遺構面が大きく削平されたことによる見かけ上の台地ということになる。他の調査区において遺構や遺物の残存状況がよくなかった理由はこの大幅な削平によるものだが、6区ではその削平の規模が地表下60～70cmに及んでいたということが判明した。6区からは見かけ状台地を中心に、竪穴住居跡、溝、土坑、ピット、包含層などが検出された。調査区南側では、中世の大溝が谷地形に落ちていく様子が確認された。見かけ状台地を除き、遺構・遺物の残存状況はよくなかった。積雪のため、幾度か作業ができない日はあったものの、2月23日までに掘削作業・記録作業を終了した。2月26日には、安全対策用の杭とトラロープの撤収、道具・機材の洗い作業を行い、2月27日にすべての発掘機材を撤収した。2月28日には建機類を撤収し、これを以って鷹取ヒゲジロ遺跡の発掘調査の全工程を終了した。

2　調査区全体の概要（遺構番号の整理）

鷹取ヒゲジロ遺跡の最終的な本調査面積は19,624㎡で、調査時期、位置関係や既存の道路、水路によって調査区を1～6区（第4図）に区分して報告する。調査区番号は、基本的に部分的であっても着手した順で付した。1・2・4・5区は、水路等で区切られつつも遺構分布としては連続し、溝では実際に調査区間でまたがるものも多い。遺構面の標高は、基本的に北から南へ低くなる傾向で、最高所で24.6m程度、最低所で23.3m程度である。これらの地点より、3区は南西方向、6区は北東方向へやや離れた位置となる。概ね巨瀬川の南岸堤防の南側に広がり、6区を除きそこから150m



第４図　鷹取ヒゲジロ遺跡調査区位置図（1/2,000）

程度南で東西に通る農道の間に広がる。いずれの地点も農地として利用されていた。

造成事業やその準備に係る工程や調査での排土置場の確保等の都合から分割して調査した場合や、道路・水路等で分かれる場合に、各区で枝番号を付した。枝番号については基本的に各区内における調査の着手順であるが、枝番号を含めた小地点間での調査順序は、区番号と逆となる場合もある。

上記のように、各区をまたがって小地区間で調査順序が推移する過程で、土坑や溝等の個別の遺構番号は、結果として各地点で錯綜した順序となるため、遺構の種類を問わず、個別で報告すべき遺構や、遺物の取り上げを伴う遺構について、全体でS－1からの現場での通し番号を付して、報告段階で各遺構別の報告番号を整理して付した。また、溝で各区間をまたがりながら配置上同一と考えられるものについては、同一の遺構番号で報告する。調査時番号と報告時番号の整合は、第1表の通りである。この整理した結果のように、遺構は竪穴住居跡4棟、掘立柱建物跡1棟、土坑22基、溝28条を中心に報告する。遺物は、パンケース7箱分と調査面積に比して非常に僅少である。

第1表　鹿取ヒゲジロ遺跡遺構番号対照表

調査区	報告番号	調査時番号	調査区	報告番号	調査時番号
5区1	1号建物	S-69	1区、2区、5区2	1号溝	S-8、S-59、S-77
4区2	1号住居	S-60	1区、2区1	2号溝	S-1
	2号住居	S-64	2区、4区1	3号溝	S-2、S-30
5区1	3号住居	S-71	2区3	4号溝	S-58
6区	4号住居	S-79		5号溝	S-62
1区	1号土坑			6号溝	S-61
	2号土坑		2区2	7号溝	S-57
	3号土坑		2区1・3、5区1	8号溝	S-4
2区1	4号土坑	S-3	3区	9号溝	S-17
	5号土坑	S-9	4区2	10号溝	S-65
	6号土坑	S-10	4区2・3	11号溝	S-55
3区	7号土坑	S-13		12号溝	S-54
	8号土坑	S-36	4区3	13号溝	S-53
	9号土坑	S-15		14号溝	S-52
	10号土坑	S-16	5区1	15号溝	S-76
	11号土坑	S-29		16号溝	S-72
	12号土坑	S-27		17号溝	S-73
	13号土坑	S-26	5区2	18号溝	S-70
	14号土坑	S-22	6区	19号溝	S-83
	15号土坑	S-23		20号溝	S-84
	16号土坑	S-24		21号溝	S-85
	17号土坑	S-20		22号溝	S-86
	18号土坑	S-21		23号溝	S-87
	19号土坑	S-25		24号溝	S-89
	20号土坑	S-18		25号溝	S-90
	21号土坑	S-19		26号溝	S-88
	22号土坑	S-28		27号溝	S-91
6区	23号土坑	S-80		28号溝	S-92

2. 1区の調査

1 1区の概要

1区は全調査地の東よりの南端に当たり、やや南北に長く、北辺のみは南東－北西の方向へ流れる水路によって区切られて斜行した形状である。水路を隔てて、北側を2区と西側を5区と接する。1区は2区－1とともに、用地造成に先行した水路新設の施工を急ぐ可能性があった地点であり、そのため最初に着手しており、平成28年度中に調査を終了した調査区で980㎡を測る。

1～3号土坑、1・2号溝が検出され、ピットも部分的ながら検出された。基盤層は、全体的に南東に向けて低くなり、検出面の標高は、北西端付近で24.1 m程度、南東の最も低い位置で23.3 m程度である。調査区の北西端部付近基本土層としては、地表から10cm程度の耕作土、10cm程度の床土、更に合わせて30cm程度の灰褐色の砂質土や粘質土の堆積層の下で基盤層となる。基盤層は北側では黄褐色砂質土で、南側は茶褐色粘質土となる傾向がある。

2 遺構と遺物

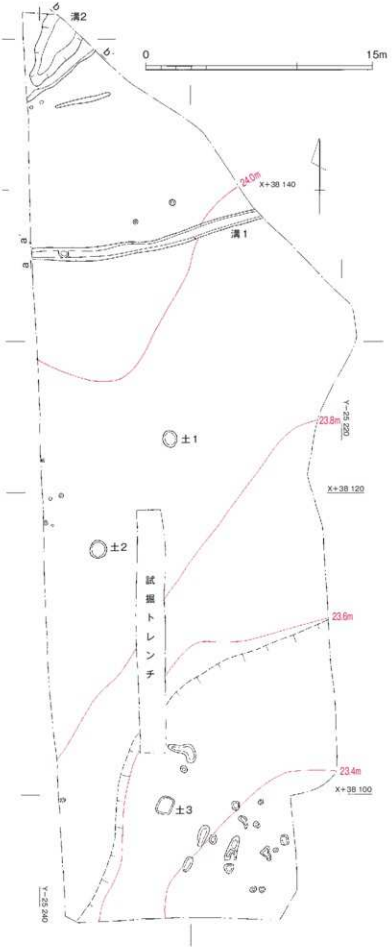
(1) 土坑

1号土坑（図版2、第6図）

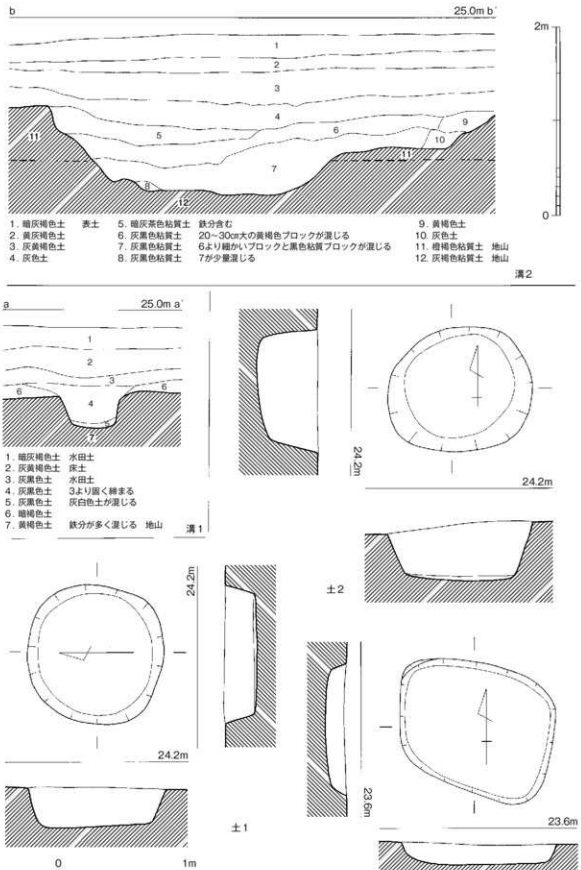
調査区の中央北寄りに位置する円形の土坑である。規模は長軸1.2m、短軸1m、深さ0.2mを測る。断面逆台形状の浅い土坑である。埋土は灰黒色粘質土であり、遺物は出土しなかった。

2号土坑（図版2、第6図）

調査区の西端中央に位置する楕円形の土坑である。規模は長軸1.1m、



第5図　1区遺構配置図（1/2,500）



第６図　１区１～３号土坑実測図及び１・２号溝土層実測図（土坑は 1/30、溝は 1/40）

東西 1m、深さ 0.5m を測る。断面逆台形状の浅い土坑である。埋土は黄灰色土であり、暗灰色土ブロックが混じる。

3 号土坑（図版 2、第 6 図）

調査区の南端中央に位置する楕円形の土坑である。規模は長軸 1.2m、東西 1m、深さ 0.1m を測る。断面逆台形状の浅い土坑である。埋土は灰黒色粘質土であり、鉄分を多く含む。

（2）溝

1 号溝（図版 3、第 6 図）

調査区の北側に位置する。東西 15m に亘って検出した。底面はほぼフラットである。直線的でなく、僅かに弧を描きながら延びる。規模は、上端幅 0.8 ～ 1m、下端幅 0.2 ～ 0.5m、深さ 0.5m を測る。埋土はほぼ水平に堆積しており、人為的な埋め戻し等の痕跡はみられない。

2 号溝（図版 3、第 6 図）

調査区の北端に位置し、北東端は 2 区 1 に、西端は 5 区に延びる大型の溝である。上端幅 2 ～ 3.5m、下端幅 0.5m ～ 1.5m、深さ 0.7m をはかる。中段がテラス状になっており、テラスから下端にかけて緩やかに落ちていく。地山付近の埋土に砂質の地山ブロックが多量に混じる。また、地山からは拳大の礫が検出された。底面はフラットであり、有意なレベル差は認められない。また、特徴の 1 つとして、埋土中に地山の砂質ブロックが観察される。

出土土器（図版 30、第 27 図 1 ～ 3）

1 は 2 号溝出土の土師器小皿。器高 1.2cm、口径 8cm、底形 6 cm を測る。表裏共に摩滅が著しいが、底部付近には板状工具による圧痕が残る。2 は同じく 2 号溝出土の土師器坏。器高 3cm、口径 13cm、底形 9 cm をはかる。外面回転ヨコナデ、内面不定方向ナデで調整される。底部には回転ヘラ切痕が残る。3 は褐釉陶器の小壺胴部片である。胎土は粗く、内外面に濃緑褐色の釉が施される。内面に強い稜線が走る点が特徴的である。

3　1 区小結

1 区では、土坑 3 基、溝 2 条、ピットなどが検出された。遺物の出土はきわめて少なかったため、図示できるものはほとんどなかった。その中で、調査区を南北に流れる 2 号溝からは 12 世紀後半～ 13 世紀中頃と考えられる土師器や 12 世紀頃の褐釉陶器が出土しているため、溝の埋没時期が当該時期よりも大きく遡ることはないだろう。後述するが、この 2 号溝は 4 区－ 2・3 を通る 12 号溝と長軸を同じにし、また規模・埋没時期も似通っているため、条里地割と何らかの関係がある可能性がある。

また、調査区を東西に流れる 1 号溝は 5 区－ 2 の 1 号溝の続きであり、当該 1 号溝の地山付近の埋土からは城ノ越式土器が出土しているため、1 号溝の埋没開始時期は弥生時代中期初頭から前期前半頃と考えられる。残念ながら土坑やピットの時期を特定できる遺物は検出されなかった。

1 区は 2 区－ 1 及び 5 区－ 2 と隣接した調査区であり、当該調査区と同じ脈絡で理解できるものと思われる。上述のように、1 区からは弥生時代中期及び中世の土器が検出されており、当該時期に溝の掘削や廃絶等の人為的行為があったことが確認された。

3. 2区の調査

1 2区の概要

2区は全調査地の北東寄りに当たり、調査時期によって西側(2区－1)と東側(2区－2)とその間(2区－3)に分かれる。2区－1は、1区とともに用地造成に先行した水路新設の施工を急ぐ可能性があった地点であり、調査を平成28年度に着手して平成29年度に持ち越した範囲で、合わせて3,627㎡を測る。2区－2・3は、遺構が非常に希薄な中で、検出された溝の部分を追う形で表土掘削を行い、排土置き場にも制約が生じたため、不整な形状となっている。水路を隔てて南側を1区と、西側で4・5区と接する。北端部は堤防上の道路に区切られる。

4～6号土坑、1～8号溝が検出され、部分的にピットの広がりが見られる。全体的に南に向けて低くなり、検出面の標高は、北端で24.5m程度、南端で23.8m程度である。

基本的な層序としては、調査区北側では、20cm程度の耕作土、その下部に20cm程度の堆積層があり、黄灰茶色粘質土の基盤層となる。基盤層は南側になるにつれ、濃茶褐色粘質土、更に茶黄色砂質土となる傾向がある。

2 遺構と遺物

(1) 土坑

4号土坑（図版5、第8図）

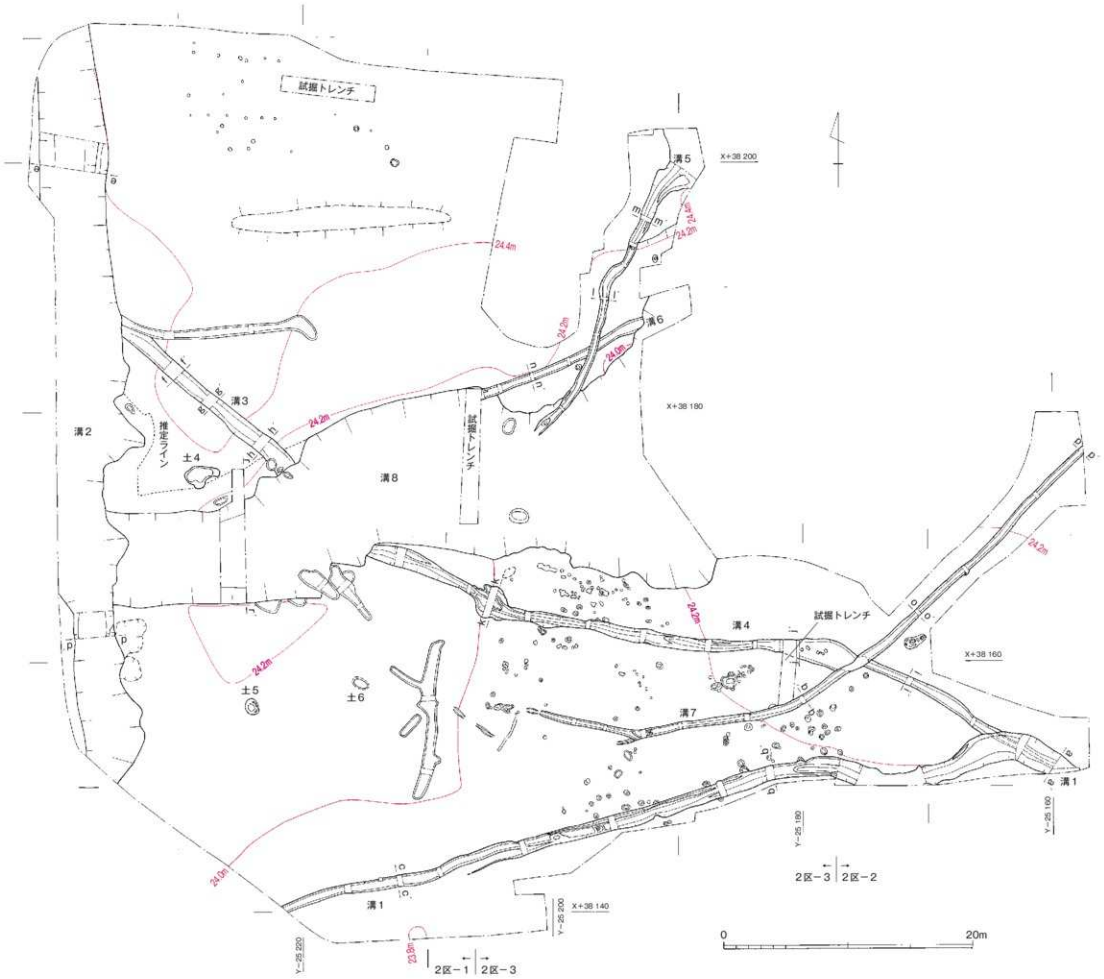
2区－1中央付近よりやや西寄りで、2・3・8号溝に囲まれる位置に当たる。平面は不整な形状であり、長軸2.8m、短軸1.7～1.8mを測り、検出面からの深さは0.3m程度である。壁の立ち上がりは、南側で緩やかで、他はやや急な傾斜である。埋土はやや砂質傾向で、上層の暗茶褐色土が主体で、床面付近にわずかに暗褐色土が堆積する。該当の位置は、基盤層が粘質のしまりのよいものから、やや砂質傾向へと変わっていく付近に当たり、遺構の壁も一様ではないため、認識しづらく、東側は掘り過ぎと見られる。

5号土坑（図版6、第8図）

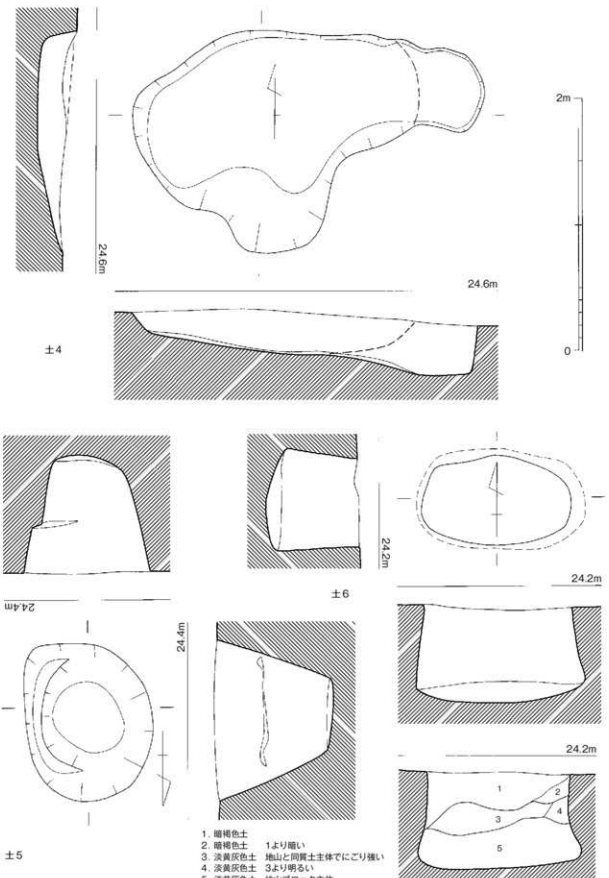
2区－1の中央より南寄りに位置し、平面は楕円形に近く、長軸1.2～1.3m、短軸1.0mを測り、検出面からの深さは0.9m程度である。壁の立ち上がりはやや急な傾斜で、南側の中位でテラス状の狭い平坦部が生じるが、壁面をやや掘り過ぎたことによるものである。埋土は、上位から灰褐色、暗灰褐色、黒灰褐色土と堆積する。上位2層は地山の小ブロックが含まれる等、色調の暗さ以外は類似しており、グライ化の度合いの差である可能性もある。

6号土坑（図版6、第8図）

2区－1の中央より南寄りに位置し、平面は楕円形で、長軸1.2m、短軸0.7mを測り、検出面からの深さは0.8m程度である。壁の立ち上がりは、非常に急峻で、下位を中心に全体的にオーバーハングするような傾斜である。埋土は、上位の暗褐色土とそれより下位で地山に近似する淡黄灰色土に大きく分かれる。この下位の埋土は、人為的な埋め戻しによる可能性や、本来更にオーバーハングした壁が、崩落して堆積したものである可能性も考えられる。



第７図　２区遺構配置図（1/300）



第８図　２区４～６号土坑実測図（1/30）

(2) 溝

1号溝（図版7、第9図）

2区－1～3に亘って南端付近をやや蛇行しながら東西に通り、全体的に西になるにつれやや南下する方向軸である。東端は調査区南壁から更に調査区外へ延び、西端も調査区外へ延びるとともに、1・5区へと連続する。東端付近で底面が、部分的に深くなるが、これは下位に残存する4号溝と判断した。検出面での幅は、東側では広く2.2～2.3m程度であるが、西側になるに連れ幅を減じ、西端では0.7m程度である。また、底の標高は、東端付近では23.8m前後であるのに対し、西端付近では23.6m前後とやや低くなるが顕著な差はなく、また更に西の1・5区では底面の標高が23.8m前後のところがあり、全体に有意な標高差がないと考えられる。2区内では4号溝を切る。埋土は、東側では上層にまとまって埋没したような灰褐色土のやや厚い上層があり、人為的に埋め戻したような地山に近似した堆積や底付近の暗色系の埋土が見られ、西側では粘性のある黒灰褐色土の単層となる。

2号溝（図版8、第9図）

2区－1の西端調査区際をほぼ南北に沿って延び、東側の上端はやや蛇行する部分もあり、西側の上端は、調査区内ではごく一部で検出した。下端の幅は、5.4m程度を測り、底の標高は北側のトレンチで23.25m、南側トレンチは23.05mと部分的ながら南の方がわずかながら低い傾向である。北側は更に調査区外に延びるが、南側は調査区内では中途で途切れ、1区でわずかに連続部分と思しき埋土が見られるが、5区まで連続して広がってはいない。非常に大型で遺物の出土もわずかであったため、掘削はトレンチ部分に限られる。埋土については、上層で厚く暗灰褐色系の層が堆積し、下層でも灰褐色系の埋土が主体で、部分的に地山の淡黄灰褐色土が主体の層もある。壁の立ち上がりは、北側の方がより緩やかな傾向にあり、両トレンチの断面で、西側の上位で幅の狭いテラス状の平坦部が認められる。また、北側のトレンチの土層より、掘り返しの可能性が想定される。

3号溝（図版8、第9図）

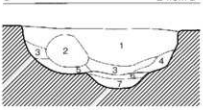
2区－1の中央より西側に位置し、南東－北西の軸で直線的に延びる。南東側は、8号溝に切られて途切れ、北西側は調査区外に及び、そのまま4区－1を通じて直線的に連続する。ただ、8号溝の北側の遺構ラインを一部切る形となるのは、非常に大型の8号溝が、長期間に亘って機能し、埋没も長期間で徐々に進行していく中で、埋没単位により切る部分と切られる部分が生じることによると想定される。

検出面での幅は1.1～1.7mで、底は全体的にあまり平坦面を成さずに幅が狭く、標高は23.6m前後で、明瞭な高低差は見受けられない。壁の立ち上がりは急な傾斜の部分が多いが、8号溝に切られる付近になると、幅がやや広がるとともに壁の傾斜もやや緩やかとなる。埋土は、上層に厚い暗茶褐色土層があり、下層で暗褐色土層が主体となる。

なお、8号溝を挟んで、反対側に4号溝が近似した方向軸で延びており、同一遺構の可能性もある。ただ、底面の標高は近似するものの、4号溝は上記ほど直線的には延びていない点、埋土が類似しない点、他の調査区を含め8号溝をまたいで連続する遺構が無い点から別遺構と判断した。

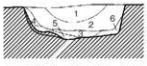
出土土器（第27図4・5）

4は須恵器坏の口縁部で、端部はわずかに外反気味である。5は土師器坏の底部で、器表は非常に摩滅する。

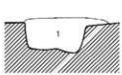


1. 灰褐色土　粘性があり、全体に均質的
2. 淡黄褐色土　砂質地山ブロック
　中央は暗く変色
3. 暗灰褐色土　にごりが強く、粒子は粗い
4. 黒灰褐色土　粘性強い
5. 黄褐色土　地山が主体だが、やや砂質でにごる
6. 暗灰褐色土　地山ブロックを含み、粒子は粗い
7. 暗灰褐色土　粘性が強く、6より暗い

} 溝4

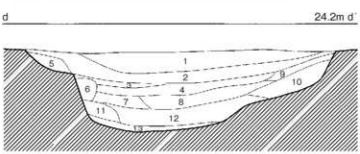


1. 暗茶褐色土　粘性が強く、しまりも強い
2. 暗褐色土　粘性がややあり、しまりは強い
3. 暗灰褐色土　粘性が強く、しまりも強い
4. 黒茶褐色土　粘性が強く、しまりも強い
5. 黒褐色土　粘性がややあり、かなりしまる
6. 暗褐灰色土　粘性がややあり、ややしまる

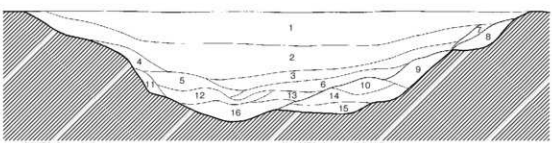


1. 黒灰褐色土　粘性ややあり、しまりよい

溝1

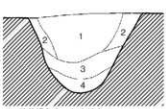


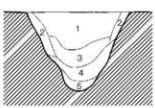
1. 暗灰褐色土　しまりよい
2. 暗灰褐色土　粘性があり、しまる　橙褐色砂粒を含む
3. 灰褐色土　粘性があり、しまる　橙褐色砂粒を含む
4. 暗褐色土　粘性があり、しまる
5. 茶褐色土　しまりよい
6. 茶灰褐色土　粘性あり
7. 灰褐色土　粘性があり、しまる　灰橙色砂粒を含む
8. 灰茶褐色土　粘性がややあり、4より明るい　橙褐色砂粒を含む
9. 茶灰褐色土　粘性があり、しまる　橙褐色砂粒を含む
10. 灰茶褐色土　しまる　9より明るい
11. 茶褐色土　粘性が強く、しまる　暗褐色砂粒を含む
12. 淡灰褐色土　地山を多く含む
13. 灰褐色土　砂質であり、拳大の礫を多く含む

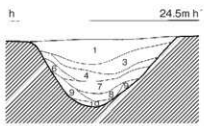


1. 暗灰褐色土　しまる
2. 暗灰褐色土　しまる　1よりやや明るく、橙褐色砂粒を含む
3. 灰褐色土　しまる
4. 暗褐色土　やや粘性あり
5. 淡黄灰褐色土　しまる　地山ブロックが主体である
6. 暗褐色土　やや砂質である
7. 灰褐色土　3より明るい
8. 灰褐色土　3、7より明るい
9. 暗褐色土　6より明るい
10. 淡黄灰褐色土　地山主体であり、シルト質
11. 暗褐色土　12よりも地山混じりである
12. 暗灰褐色土　粘性がやや強く、鉄分の沈着が多い
13. 暗灰褐色土　シルト質であり、やや鉄分が目立つ
14. 暗褐色土　シルト質
15. 淡灰褐色土　粘性がやや強く、地山を多く含む
16. 暗褐色土　シルト質だが、粘性が強い　最も暗い

溝2







1. 暗茶褐色土　しまりよい
2. 暗茶褐色土　1より明るい
3. 暗褐色土
4. 暗褐色土　3より暗く、やや粘性あり
5. 暗褐色土　4より地山に近く、淡黄色砂粒を多く含む
6. 暗褐色土　淡黄色地山土をやや含む
7. 黒灰褐色土
8. 黒灰褐色土　7よりやや明るい
9. 暗褐色土　淡黄色地山土を多含む
10. 黒褐色土

溝3

0　2m

第９図　２区１～３号溝土層実測図（1/40）

4号溝（図版7・9、第10図）

やや方向軸が変化するが基本的に東西の方向軸で、2区－1～3に亘って延びる。西側は、8号溝に切られて途切れ、東側は1号溝に切られる。ただ、東端部の1号溝の下位で、わずかに4号溝が残存しており、1号溝と方向を同じくして調査区へ延びることが確認できる。

2区－2・3の境界付近で7号溝と切り合う。2区－2の調査当初においては溝西端部が調査区壁際に位置し、延長部分がどのように連続するか判然としない中で、切り合い関係が不明瞭であったが、7号溝に切られると判断した。なお、この切り合い部分付近（j－j´）で、4号溝の幅が急に広がるが、オーバーハング気味の壁の立ち上がりや、複雑な埋土の堆積から4号溝とは別の遺構が切っている可能性が高いと考えられる。また、2区－2・3の境界付近（k－k´）でも急激に遺構の幅が広がるが、土層から上位は別遺構が所在する可能性が高いと考えられる。この部分の最下層は、狭い範囲で深く下がるが、基盤層中で砂質の傾向の集塊部分で、本来は地山となる部分であった可能性も考えられる。

検出面での幅は1.0m前後の部分が多く、底面での標高は23.6～23.8m前後で、目立った差は生じていない。埋土は、黒灰褐色土を主体に暗色系のものがほとんどである。

出土土器（第27図6～8）

6は須恵器坏身の底部片で、外面に高台が貼付される。7は土師器小壺で、短頸でわずかに口縁部が開く。8は土師器塊で、やや高く外方に開く高台が外底部に貼付される。

5号溝（図版9、第10図）

2区－3の北端部に位置し、やや北東－南西の軸に振れた南北に近い方向軸で延び、6号溝を切る。北側では、地形が落ち込むために検出面で地山が途切れ、暗茶褐色土が堆積する部分から検出できなくなる。南側では8号溝によって途切れるが、8号溝の北側の遺構ラインを切りつつ、その埋土の中途で検出できなくなる。これは、非常に大型の8号溝が、長期間に亘って機能し、埋没も長期間で徐々に進行していく中で、埋没単位により切る部分と切られる部分が生じることによると想定される。上端の標高は、基盤層が高い北端では、24.4m前後で、南側へ急に低くなってからは24.1m前後である。一方で、底の標高は23.9m前後で、全体で顕著な差は生じていない。検出面での幅は、北端部では広がって2.0m以上の部分もあるが、概ね0.8m以下の部分が多い。埋土は、上層が残る場合は、暗灰・灰褐色系で、下層では暗褐・暗灰褐色である。検出面が北側から低く落ちる付近の遺構内で、完形に近い土器も出土した。

出土土器（図版30、第27図9～14）

9は土師器の小型丸底壺で、非常に短い口頸部がわずかに開く。やや粗製化した傾向にあり、内面にわずかにケズリが見られる。10は土師器広口壺で、肩部付近が欠失する。頸部がやや強く締まり、口縁が直線的に伸びて開く広口壺である。丸底で外面ハケ、内面ケズリの調整が見られる。11は土師器甕で器壁は全体的に厚く、器表の摩滅は激しい。12は土師器甕で器壁は全体的に厚く、器表の摩滅は激しい。内面にケズリが施される。13は土師器高坏坏部で、脚部との接合部の内側に突出部が見られる。14は高坏脚部で、器表の摩滅が激しく、裾部に向かって厚みを減じる。

6号溝（図版10、第10図）

2区－3の北側に位置し、東北東－西南西に近い方向軸で直線的に通り、8号溝とそこから連続して地形が落ち込むために地山が検出面で途切れる部分により両端が途切れ、その間の検出された

長さは 14m 程度である。西側では、8 号溝の北側の遺構ラインを切っており、検出した範囲の更に西側でも埋土の差が認識できずに検出に至らなかったものの、ある程度連続して延びていた可能性はある。ただ、非常に大型の 8 号溝が、長期間に亘って機能し、埋没も長期間で徐々に進行していく中で、埋没単位のどこかでは、完全に途切れると想定される。検出面での幅は 0.6m 前後で、底の標高は 23.8 ～ 23.9m 前後である。埋土は、暗茶褐色の上層と暗灰色の下層に分かれる。

7 号溝（図版 10、第 10 図）

2 区－ 2・3 に亘っており、東側では北東－南西に近い方向軸で、西側ではほぼ東西軸に近く、その間が弧状に通る。西側が 2 区－ 2 内の中途で途切れるのに対し、東側では調査区外へ延びる。2 区－ 2・3 の境界付近で 4 号溝と切り合う。2 区－ 2 の調査時において、4・7 号溝西端が調査区壁際に位置し、延長部分がどのように延びていくか判然としない中で、切り合い関係が不明瞭であったが、7 号溝が切ると判断した。検出面での幅は、0.5m 前後が主体で、底の標高は 24.0 ～ 24.1m 前後で、明瞭な高低差の傾向はない。埋土は、上層に暗茶褐色や黒茶褐色土が見られる部分があり、下層では暗灰褐色土が主体である。

出土土器（第 27 図 15・16）

15 は須恵器坏身で、小片でたちあがりの残存部もわずかであるが、全体に細かい剥離状に欠損しており、意図的に口縁部を打ち欠いた可能性がある。16 は、須恵器鼈の口縁部小片である。口唇部は狭い面を成す。

8 号溝（図版 10、第 10 図）

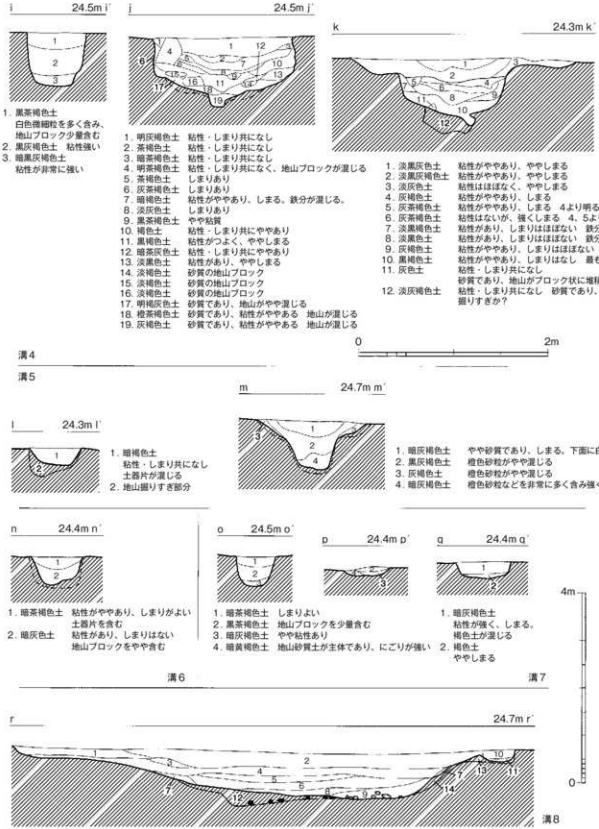
2 区－ 2・3 に亘って東西に近い方向軸で通り、西側は調査区外へ及び、5 区へと連続し、東側へは検出面で地山が途切れる幅が広がっていき、東側の地形の落ち込みに繋がる様相と考えられる。埋土は上層で黒灰褐色、黒褐色土が主体で、下層が暗褐色土主体であるが、北側の上層には地山に非常に近似した淡黄褐色土層があり、これを含めるとトレンチ部分での幅は、約 10m と非常に大型である。壁の立ち上がりは、緩やかな傾斜で、特に北側でその傾向が顕著である。2 号溝に切られ、3・4 号溝を切る。また、5・6 号溝が、8 号溝の北側の遺構ラインを切りつつ、その埋土の中途で検出できなくなる。これは、非常に大型の 8 号溝が、長期間に亘って機能し、埋没も長期間で徐々に進行していく中で、埋没単位により切る部分と切られる部分が生じることによると想定される。なお、土層断面図にあるように、8 号溝と埋土の区分が困難な他の遺構が範囲内に含まれている可能性がある。底の標高は、23.1m 前後である。元来低い地形で、自然流路状であったものが、ある程度人為的に管理されながら、長期間機能していたと考えられる。遺物の出土量が皆無であったため、掘削をトレンチ部分にのみに留めている。

出土土器（第 27 図 17）

17 は遺構の上面出土の須恵器坏蓋の口縁部小片で、端部付近のみが残存し丸みをもった断面である。

(3) その他の出土土器類（図版 30、第 27 図 18 ～ 25）

18 は確認調査時に出土した縄文土器浅鉢の口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部は屈曲して立ち上がる。19 は確認調査時に出土した弥生土器甕の底部で、底部の裾が外方へやや広がる。20 は土師器壺の口頸部で、やや外反しつつ上方へ広がる広口壺である。頸部内面に接合部分の起伏が



第 10 図　2 区 4 ～ 8 号溝土層実測図（8 号のみ 1/80、他は 1/40）

見られる。21は土師器小型丸底壺で、口頸部が欠失するが、以下はほぼ完存し、扁球形に近い器形である。器壁は薄く、下半はケズリ後にナデを施しており、全体に丁寧なつくりである。側面に不整形な孔があり、意図的な穿孔と考えられる。22はピット出土の土師器鉢で、口縁部付近は、それ以下に比してやや肥厚する。外面はハケが施され、内面は器壁の薄くなる部分は丁寧なナデが施されるが、その前にケズリが施された可能性がある。胎土は暗茶褐色で、雲母片を多く含み、特徴的である。23は須恵器坏蓋で、外面は口縁部付近以外では、器表が剥落する。24はピット出土の土師質の甕の底部で、外面はナデ、内面は粗雑なナデが施されるとともに黒色の付着物が見られる。25は表採された青花碗の口縁部小片で、内面に文様が見られる。

3　2区小結

2区に所在する遺構は、4～6号土坑、1～8号溝、その他ピットである。

土坑からは、明瞭な時期を示す遺物は出土していない。5・6号土坑については、壁のしっかりした立ち上がりとなる掘方の遺構が少ない中で、両者が近接した位置に所在する点に、相互に関連した機能を帯びた可能性を想定できるが、それ以上の言及はできない。

溝の中で、2区内で時期の判別できる出土土器が伴うのは、3～5、7、8号溝である。それぞれの時期は、3号溝で8～9世紀、4号溝で8～10世紀、5号溝で古墳時代前期後葉、7号溝で古墳時代後期、8号溝は7世紀代である。しかし、出土土器の量が少なく、ほとんどが小片であるため、遺構の時期を正確に反映しているかは検討の余地がある。例えば、3号溝が8号溝に切られる点は、出土土器の様相とも整合する。しかし、一方で、4区に延長した3号溝の土器の出土状況から、この溝は弥生時代の所産と考えるのが妥当である。また、7号溝が4号溝を切る点は、出土土器の様相と整合しない。これは、出土土器が小片かつ少数である点とともに、この切り合いの検出自体が調査区小単位の境界のため不明瞭であったこと、また4号溝は別遺構と一部で重複する可能性がある点も考慮しておく必要がある。また、2区では1号溝の出土土器はないものの、5区－2での出土土器から弥生時代中期初頭と想定される。同様に、2号溝でも2区では出土土器を伴わないが、1区での出土土器が12世紀後半である点を援用すると、2号溝が3、8号溝を切るのに齟齬はないと言える。

2号溝について、本遺跡は、現在にも地割が残る条里遺構の中に所在し、2号溝の方向軸にほぼ沿うため、条里と関連して、もしくは規制を受けて掘削されたと考えられる。

なお、他区にも連続するとともに、規模の大きな8号溝の付近の標高は、周辺よりもやや低い傾向にある。また、この8号溝に先行して南北にまたいで延びる溝もないため、8号溝周辺は元々低い谷地形で流路状の機能を長期間担っており、それに掘削を加えて掘方を溝状に整えた可能性が考えられる。8号溝の掘方断面の壁の立ち上がり（第10図）が、南北で相違がある点が、自然地形と人為的影響の双方の表れとも見られる。また、3号溝が8号溝の上端付近の地山に近似した埋土を切りつつ、内側の埋土内では遺構が続かず、切られる形に逆転するのは、3号溝の長期間の存続を示すものと考えられる。なお、8号溝は、2号溝が掘削された時点で廃絶している。

調査区全体としては、出土遺物が非常に少なく、更に遺構に伴うものは特に限られつつも、その時期は縄文時代後期の浅鉢から、弥生時代、古墳時代、古代を経て、中世後期の青花に至るまで断続的ながら、大枠での土地利用の継続性が表れている。

4. 3区の調査

1 3区の概要

3区は全調査地の南西隅に当たり、既存の道路によって北側(3区－1)と南側(3区－2)に分かれる。3区－1は東西に長い調査区で2,173㎡を測り、3区－2は遺構の広がる部分のみをバックホーで広げた結果、不整な調査区で249㎡を測り、合わせて2,422㎡となる。直接他の調査区とは接していない飛び地となっている。

個別に報告する遺構としては、7～22号土坑と9号溝を挙げているが、遺構番号を付していない大小の遺構が密に広がる。これらは、全体的に不整な平面形を成す部分が多いとともに、平面的な大きさ、深さともに非常に多様である。個々の底面でも起伏が目立つものが多い。検出面での基盤層の表出範囲が限られるほどの著しい密集・切り合いもあり、個別検出での把握が非常に困難な点、該区の調査時点で依然当初の5万㎡が調査対象であった点、またこの遺構の出土遺物が極めて僅少な点などを勘案し、3区－1西側の遺構は完掘した上で、3区－1東側や3区－2では、切り合いの状況やその中での埋土の特徴を把握するために半裁やトレンチによる部分的な掘削に留まっている。これらの集塊状の掘削部分は「土坑群」として報告する。

調査区内の北側では、急に遺構が希薄になって遺跡が途切れ、調査区西側でも遺構が希薄な傾向である。また調査区東側では流路状の落ち込みが広がり、部分的に残る基盤層部分に遺構が集中し、その更に東側で基盤層が下がり遺構が途切れる。調査区内の検出面の高低差は、全体的にさほど大きくなく、標高24.1～24.3 mの範囲が多く、最も低い南西隅付近でも24.0 m程度である。基本層序としては、合わせて20㎝程度の耕作土・床土が上層にあり、その下の10～20㎝程度の堆積層の直下から淡黄灰褐色粘質土の基盤層となる。全調査区中最も粘土質の基盤層であるため、非常に水捌けが悪く、降雨による滞水等の影響を最も受けた地点である。

2 遺構と遺物

(1) 土坑

7号土坑（図版12、第12図）

3区－1南西端付近に位置する。平面は不整形で、南北に通る西側の一部が暗渠によって切られ、南側は調査区外に及ぶ。東西軸で3.5m、検出範囲の南北軸で2.5mを測り、非常に大型である。検出面からの深さは最深部で0.3m程度を測り、壁の立ち上がりは、急な部分が多いが、北東側はテラス部分や部分的な落ち込みなどで複雑な形状である。床面は、全体的に起伏のある部分は少ないが、まわりよりも部分的に落ち込む部分が南側に見られ、また中央部が、まわりよりも0.15～0.2m程度突出して高い。

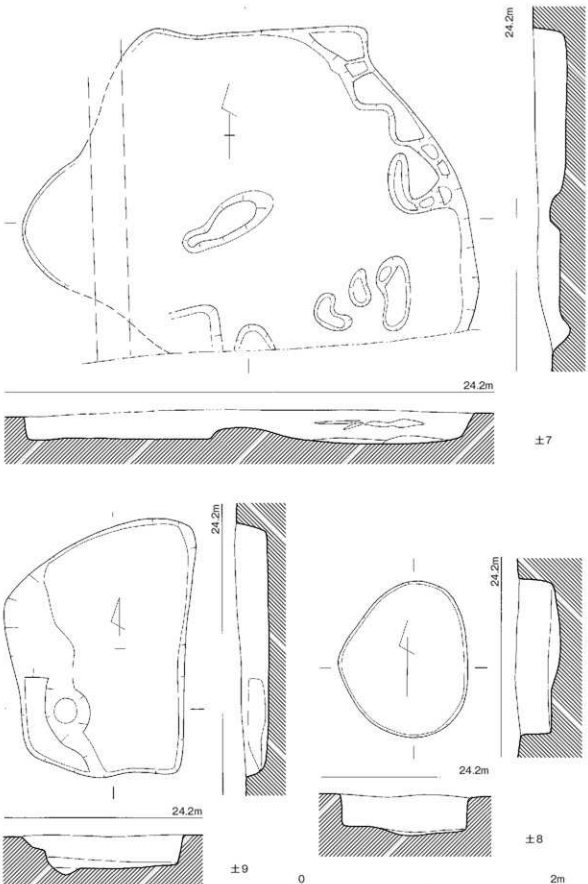
8号土坑（図版12、第12図）

3区－1南西端付近に位置し、9号土坑の南西側にあたる。楕円に近い平面形で、長軸1.2m程度、短軸1.05m程度を測る。検出面から床面の深さは0.3～0.35m程度で、底面は中央部が周囲よりもやや急に下がる。壁は、ほぼ垂直に近い急峻な立ち上がりである。

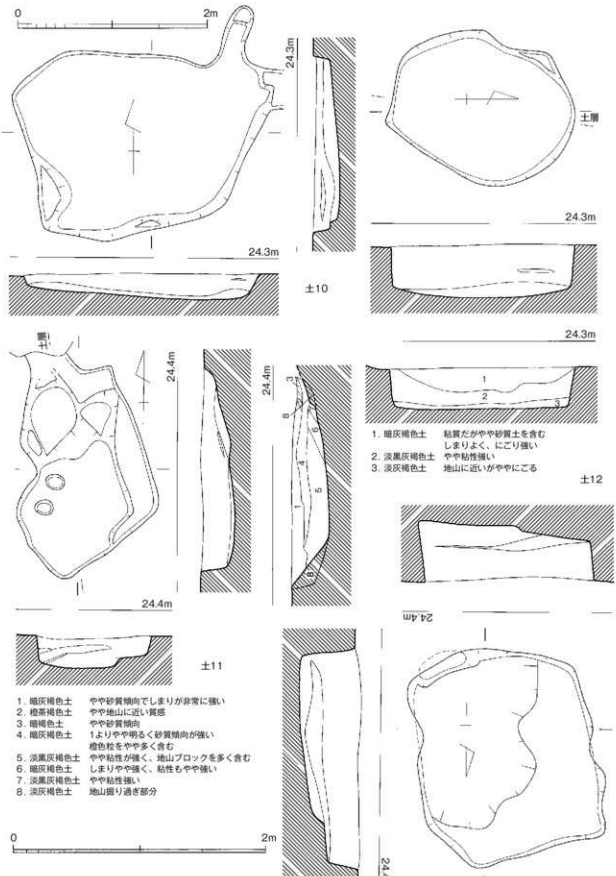
9号土坑（図版12、第12図）

3区－1南西端付近に位置し、8号土坑の北東側にあたり、やや不正な隅丸四角形状の平面である。南北に通る暗渠により、上部が一部攪乱を受ける。長軸2.0m程度、短軸1.5m程度を測り、検出面

第 11 図　3 区遺構配置図（1/250）



第12図　3区7～9号土坑実測図（1/30）



第 13 図　3 区 10 ～ 13 号土坑実測図（10・11 号は 1/40、他は 1/30）

から床面の深さは、0.3 ～ 0.35m 程度の部分が多い。壁の立ち上がりは、非常に急な傾斜の範囲が多いが、西側のみ非常に緩やかであるとともに、テラス状や深くなる部分があるなど、異なる様相である。

10 号土坑（図版 13、第 13 図）

3 区－ 1 内の西側に位置し、11 号土坑の西側にあたる。一部が突出する不正な平面形で、南北に通る暗渠にわずかに攪乱を受ける部分がある。長軸である東西軸の残存長で 2.9m 程度、南北軸で 2.0m 程度を測る。検出面から床面までは、最深部で 0.3m 程度の深さで、床面に目立った起伏はなく、南東側が深い傾向である。壁の立ち上がりは、やや傾斜が強く、部分的にテラス状に変化する箇所も見られる。

11 号土坑（図版 13、第 13 図）

3 区－ 1 内の西側に位置し、10 号土坑の東側にあたる。やや細長い不整な平面形で、北端部を別遺構に切られ、南北の長軸で残存長 2.4m 程度、東西短軸で 1.5m 程度である。床面の起伏は大きくはないが、全体的に変化があり、検出面からの深さは最深部で 0.3m 程度である。壁の立ち上がりは、やや緩やかな傾向である。埋土の特徴は、下半に粘性の強い暗色系埋土が堆積し、特に最下層は地山ブロックが目立つ。一方で、上層は粘性主体ながら、やや砂質傾向である。

12 号土坑（図版 13、第 13 図）

3 区－ 1 内の西側に位置し 11 号土坑の東側にあたる。やや不整な楕円形に近い平面で、長軸 3.0m 程度、短軸 1.2m 程度を測る。壁の立ち上がりは、垂直に近い非常に急な傾斜で、部分的にテラス状になる。検出面から床面までは、0.4m 程度の深さである。埋土については、上層はやや砂質土を含む暗灰褐色系で、下層は粘性の強い黒灰色系で、最下層は地山に近似しつつもやや濁ることから分層したが、本来地山と一体となるものが、埋土との境界面で埋土の影響を受けた可能性もある。

13 号土坑（図版 14、第 13 図）

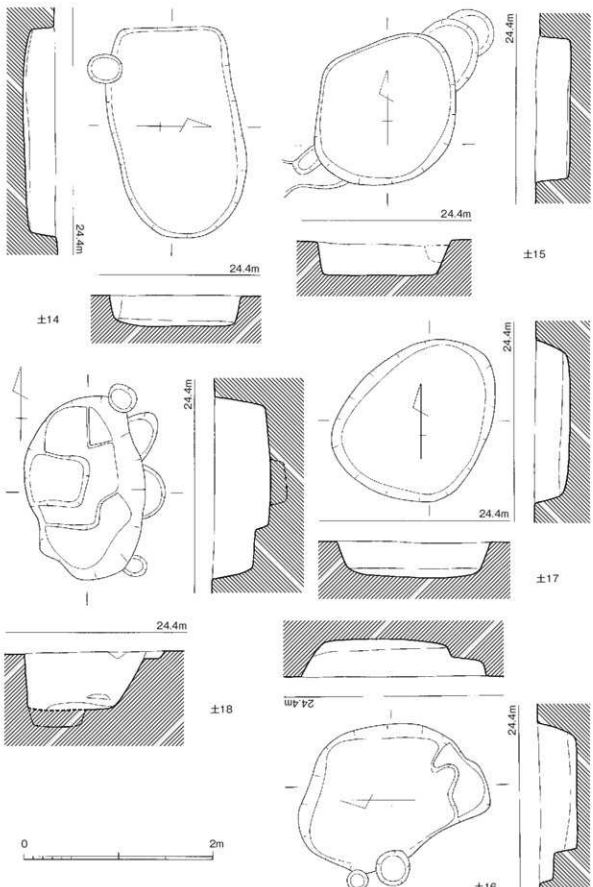
3 区－ 1 内の中央より西側に位置し、14 号土坑の西側、16 号土坑の北側にあたる。やや不整ながら、隅丸長方形に近い平面で、長軸 1.7m 程度、短軸 1.4m 程度を測る。床面は北西隅から南東隅に向けて低くなる傾向にあり、最深部で検出面より 0.5m 程度の深さを測る。壁の立ち上がりは、非常に急な傾斜で、部分的にオーバーハングする状態である。

14 号土坑（図版 14、第 14 図）

3 区－ 1 内の中央より西側に位置し、13 号土坑の東側、15 号土坑の西側、16・17 号土坑の北側にあたる。長軸両端が、それぞれ片側ずつ長楕円形と隅丸長方形に近く、両者を合わせたような平面形と言え、一部が他のピットに切られる。長軸 2.2m 程度、短軸 1.4m 程度を測り、床面はほぼ平坦に近く、検出面からの深さは 0.35m 前後を測る。壁の立ち上がりは、やや急である。

出土土器（第 28 図 1）

1 は龍泉窯系青磁碗の体部の小片で、外面に鎬蓮弁文を有する。



第 14 図　3 区 14 ～ 18 号土坑実測図（1/40）

15 号土坑（図版 14、第 14 図）

3 区－ 1 内の中央より西側に位置し、14 号土坑の東側、18 号土坑の北側にあたる。やや不整な楕円形の平面で、周囲のピット等を切る。長軸 1.8m 程度、短軸 1.5m 程度を測り、床面はほぼ平坦に近く、検出面からの深さは 0.35m 前後である。

16 号土坑（図版 15、第 14 図）

3 区－ 1 内の中央より西側に位置し、13・14 号土坑の南側、17 号土坑の西側にあたる。不整な楕円形状の平面で、一部ピットに切られ、長軸 2.0m 程度、短軸 1.5m 程度を測る。床面は概ね平坦で、南側で一部テラス状の高い平坦部を伴い、検出面より最新部まで 0.4m 程度の深さを測る。壁の立ち上がりは、やや緩やかである。

17 号土坑（図版 15、第 14 図）

3 区－ 1 内の中央より西側に位置し、14・16・18・19 号土坑に囲まれる位置にあたる。楕円形に近い平面で、長軸 1.9m 程度、短軸 1.5m 程度を測る。床面は概ね平坦で、検出面より 0.35m 前後の深さである。壁の立ち上がりは、やや緩やかな傾向である。

18 号土坑（図版 15、第 14 図）

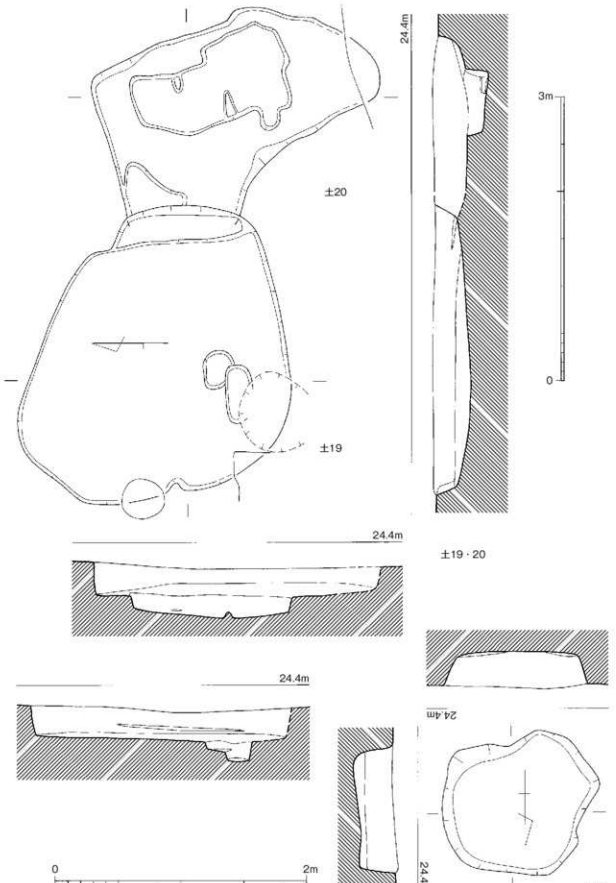
3 区－ 1 内の中央より西側に位置し、15 号土坑の南側、17 号土坑の東側にあたる。不整楕円形に近い平面で、双方の先後関係にあるピットとの切り合いがある。長軸 1.9m 程度、短軸 1.3m 程度を測る。床面の起伏がやや目立ち、テラス状の平坦部をなす部分もある。ただ、埋土・地山がある程度グライ化していたため、その境界の峻別が難しい点があり、半裁の際に先に掘削した西側は全体的に掘り過ぎた可能性が高く、特に中央部の一段低くなって最深部である箇所は、明らかに掘り過ぎた部分である。壁の立ち上がりは、西側は急峻で東側が緩やかな傾向があるが、上記のように西側は掘り過ぎの結果によるものと考えられる。

19 号土坑（図版 16、第 15 図）

3 区－ 1 内の中央より西側に位置し、17・18 号土坑の南側にあたり、東側の 20 号土坑に切られる先後関係である。隅丸方形が崩れたような不整な平面で、長軸 3.0m 程度、短軸 2.8m 程度を測る。床面はあまり起伏が少ないが、部分的にピット状に深い。壁の立ち上がり全体的にやや急な傾斜で、東側のみ中途である程度の広さのあるテラス状の平坦面が生じて床面に至る。検出面から床面までの深さは 0.4m 程度を測る。

20 号土坑（図版 16、第 15 図）

3 区－ 1 内の中央より西側に位置し、西側の 19 号土坑に切られる先後関係である。やや細長い不整な平面で、残存長で長軸 2.8m 程度、短軸 2.2m 程度を測る。床面には、細かい起伏はほとんどなく、一端広い平坦面を成し、そこから更に落ち込んで 2 段階で最深部に至り、壁の立ち上がりは、概ねやや急な傾斜である。下段での落ち込む平面も不整で、壁の立ち上がりに小さなテラス状の平坦部の生じる部分がある。検出面から最深部までの深さは、0.6m 程度を測る。



第 15 図　3 区 19 ～ 21 号土坑実測図（21 号のみ 1/30、他は 1/40）

21号土坑（図版16、第15図）

3区－1内の中央の北寄りに位置する。不整な円形に近い平面で、径1.2～1.3m程度を測り、検出面から床面まで0.3m程度で、壁の立ち上がりは全体的に急な傾斜である。床面は全体的な起伏がなく、平坦な傾向にある。埋土の特徴は、上層で暗灰褐色のやや砂質傾向であるのに対し、下層では黒灰褐色系のやや粘性の強いものである。

中央部土坑群（第16図）

3区－1の13～20号土坑が集中する部分から東側では、検出面での地山の表出部分が極端に狭くなる程遺構の占める範囲が広い。この地点では、13～20号土坑とは異なり、個々の遺構の平面形を認識することが困難だった。これらは、切り合いが著しい点を考慮しても、個々の遺構の平面形が、大きくかつ著しく不整であると見られる。13～20号土坑より東側で、且つ更に東寄りの旧流路跡付近で途切れるまでの土坑群を、「中央部土坑群」とする。これら土坑群の検出面の標高は、概ね24.0～24.2m、床面の標高は、概ね23.8～24.0mで、深さとしては20～30㎝程度が主体で、切り合いの結果によるものもあると考えられるが、大小のテラス状の部分がある。旧流路跡の埋土である黒灰褐色粘質土を切って掘削がかかる部分がいくつかあるが、そこで掘削は止まっており、この黒灰褐色粘質土を全体で掘削して形成された土坑はない。

東側土坑群（図版17、第16図）

3区－1の東側では、広く旧流路跡の黒灰褐色粘質土埋土や、地形が東側に落ち込んでいくために検出面上に暗茶褐色のやや砂質傾向の堆積土が広がる。これらに囲まれるようにして淡黄灰褐色の粘質土である基盤層が残る部分があり、そこに集中して掘削された土坑群を「東側土坑群」とする。個々の遺構の平面形が認識し難い部分が多くあり、切り合いが著しい点を考慮しても、大きくかつ著しく不整な平面形が多いと考えられる。個々の土坑の単位として、不整な円形、楕円形、隅丸方形等の土坑も確認できるが、旧流路跡の埋土である黒灰褐色粘質土を全体で掘削して形成された土坑は、明灰褐色系の埋土が多く、時期が他の大部分と異なるものが多いと想定される。個別検出での把握が非常に困難な点、該区の調査時点で依然当初の5万㎡が調査対象であった点、またこの遺構の出土遺物が極めて僅少な点などを勘案し、埋土の特徴の把握として半裁やトレンチによる部分的な掘削に留まっている。

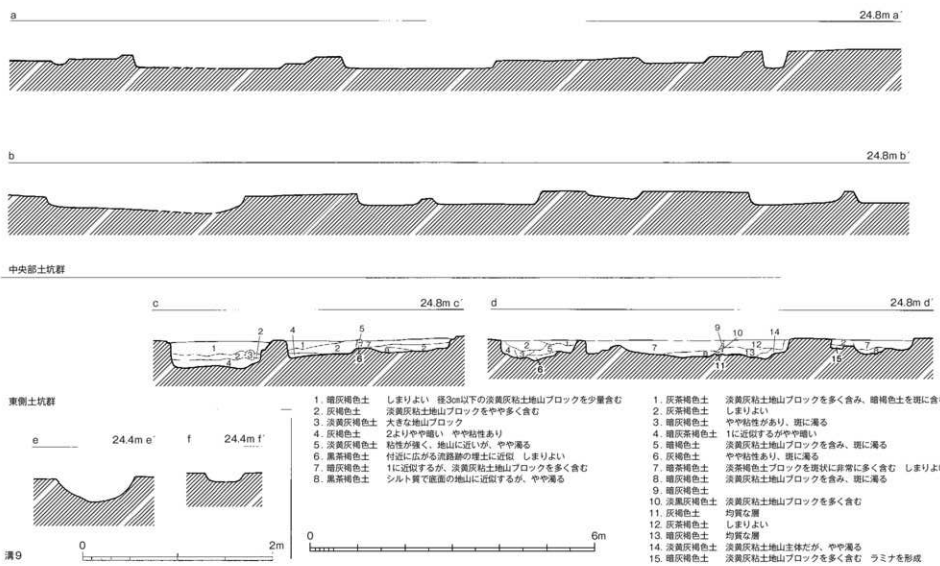
検出面の標高は24.2～24.3m、限られた掘削部分の底の標高は23.8～24.0m、検出面から20～40㎝程度の深さとなるものが主体である。また、切り合いの結果によるものもあると考えられるが、大小のテラス状や段階的に不整に落ち込む部分が認められる。

2箇所で掘削したトレンチでの土層観察を行った。下層で主に地山の淡黄灰褐色粘土に近似するが濁る層、地山淡黄灰褐色粘土ブロックを多く含む層、灰褐色系の粘性の強い層等が見られる。上層の埋土は暗灰褐色系、灰茶褐色系でしまりがよく、やや砂質傾向で、地山ブロックを含む層も多い。また、土坑が埋没後に近接して繰り返し掘削されている様相が、土層の切り合いから確認することができる。

（2）溝

9号溝（図版17、第16図）

3区－1の西端部分に位置し、北西－南東の方向軸でほぼ直線的である。北西側は調査区外へ



第16図　3区中央部土坑群断面、東側土坑群トレンチ土層及び9号溝土層実測図
（9号溝のみ1/40、他は1/80）

延び、南東側は途切れる。検出面での幅は 0.4 ～ 0.5m 程度の部分が多いが、西端では 1.2m 程度と最も幅が広くなる。検出面から床面までの深さは、南東側では 0.1m 未満で、壁の立ち上がりは単調であるのに対し、北西側では約 0.3m 程度であるとともに、壁の立ち上がりもテラス状の部分や中端等の変化のある壁の立ち上がりである。床面の標高は、北西側になるにつれて低くなる傾向にある。埋土の特徴は、黒灰褐色系の単層であり、他遺構との切り合いでは、先後双方の遺構が見られる。また、北西側では 30 数個の小礫が、部分的にまとまって出土した。

(3) その他の出土土器類（図版 30、第 28 図 2 ～ 7）

2 はピット出土の須恵器坏蓋の小片で、やや丸みをもった短いかえりを有する。4 は土師器椀の底部小片で、断面三角形状の小さな高台が付される。5 はピット出土の須恵器蓋の口縁部片で、口縁付近はやや厚みを増すとともに、端部は丸く収められる。5 は土師器坏で、復元による口径は 11.0cm、器高 3.0cm である。底部はわずかしか残存しておらず、糸切り等の痕跡は判然としない。6 は清掃時に検出した須恵器坏身である。口縁の立ち上がりは、低く内傾気味で、浅い。7 は縄文土器深鉢の口縁部小片で、胎土に非常に多くの滑石小片を含む。波状口縁でその下部外面に 2 列の押点文が見られる。

3　3 区小結

3 区に所在する遺構は、7 ～ 21 号土坑、9 号溝からなる。3 区の遺構群で、最も特徴的であるのは、遺構の密度である。土坑として報告するのは 15 基であるが、全調査区の中で突出して高い遺構密度である。その一方で、出土土器が著しく少量である点も顕著な特徴と言える。

出土土器は、これら遺構群の時期を比定する根拠となるが、図示して報告できたのは、13 世紀の青磁片（第 28 図 1）で、他に個別土坑としていないながら遺構内出土や、包含層等の周辺出土のものとして、古墳時代後期から古代にかけての須恵器・土師器片（第 28 図 2 ～ 6）がある。その他の図示できなかった遺構内出土の遺物としては、詳細が判別し難い土師器小片がほとんどであるが、外面に平行タタキ、内面に同心円文が見られる須恵器大甕の胴部片が複数個体見られ、古代の範疇である可能性が高い。その他に、ごくわずかに瓦器小片や須恵器梅瓶と見られる口縁小片がある。したがって、最終的な掘削時期が、13 世紀前後以降の可能性が高いということのみ言及できる。

さらに、遺構の平面形、壁の立ち上がりや床面の起伏などで不整な掘方のものが多く、また西側から東側になるにつれ、遺構の密度が高くなるとともに切り合いも激しくなる傾向である。これは掘削方法の時期的な変遷等の差異が表れている可能性がある。また、東側の密集部の土層から、掘削後埋め戻しては掘削を繰り返している様相が認められる。

この遺構群の性格として、土器等の生地素材としての粘土の採掘坑の可能性が指摘できる。その根拠として挙げられる 1 点目として、上述のように粗雑な掘方とともに出土遺物が僅少で、通常の集落域で見られる遺構と性格を異にする点が挙げられる。2 点目として、この 3 区の基盤層は、他区と比べて粘質が強い特徴が見られ、また、3 点目として、遺構の密集度の高い東側でも、流路や地形の落ちとして基盤層が途切れる範囲では、ほとんど遺構の掘削が途切れているという点が挙げられる。以上から、粘土採掘坑としての可能性を挙げたが、検討課題もある。粘土の採掘坑である場合、継続して粘土を掘削し続けるのが合理的であるが、先述の土層に表れるように、埋め戻しと掘削が繰り返された理由を説明する必要がある。埋め戻しの埋土には、地山ブロック

を多く含み、掘削後さほど時間を置かずに埋め戻しに及んだと見られる部分もある。当該遺跡は、現在でも条里遺構が残る地帯の一角に位置し、遺構が掘削された時期には既に条里が成立したと考えられ、なぜその範囲内で粘土の採掘行為が続けられたのかという疑問も残る。最後に、3区の唯一の溝である9号溝は、小規模なもので、土器は出土しておらず時期に言及できない。

5. 4区の調査

1 4区の概要

4区は全調査区中で北西端に位置し、調査時期や既存の水路によって4区－1～3に分かれ、東側で2区と接し、南もしくは東側で5区と接する位置に当たる。4区－1(665㎡)、4区－2(1,618㎡)、4区－3(1,280㎡)の合わせた調査面積は、3,563㎡となる。なお、1区・2区－1が用地造成に先行した水路新設の施工を急ぐ可能性があり、既存の溝を挟んで西側に隣接する4区－1部分にも、その施工範囲がわずかに及んでいた。表土掘削の結果、そこで2区から連続する3号溝が確認されたため、溝の延長する周辺を4区の中でいち早く調査した。その後、5区－1の調査時点で、4区－1と接する北端に竪穴住居跡が検出されたため、4区－1の表土掘削範囲を既存の水路に制約される間際まで更に南側へ広げたが、新たな遺構は確認されなかった。北端部は堤防上の道路に区切られる。

1・2号竪穴住居跡と3・10～14号溝が検出されている。前述のように3号溝は2区につながり、10・11号溝は4区－2・3にまたがっている。掘方や平面的な大きさ、埋土の堆積状況、遺物の出土状況等を合わせて、土坑として報告するものはないが、ピットは4区－3の東側にほとんど無い以外は、場所による多寡はありつつも全体的に広がっている。検出面の標高は、24.4～24.6m前後で全体的に高低差が少ない。

基本的な層序は、新旧の耕作土・床土が40㎝程度の厚さで互層となり、その直下で基盤層となる。基盤層は、黄白色粘質土と橙褐色砂質土が4区内でも部分により異なっている。

2 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（図版19、第18図）

4区－2の南西側に位置し、西側を7号溝に切られるが、平面長方形と考えられる。南北の短軸で3.2～3.3mを測り、東西の残存長で3.6～3.7mを測る。検出面から床面までは0.1m程度の深さで、遺存状態は悪い。周壁溝が東半で見られ、床面からの深さは3.4cm程度で、南壁では壁周溝がそのまま屋内土坑に繋がる。壁際の屋内土坑は平面円形に近く、床面からの深さは15cm程度である。出土土器は全体に非常に少なく、その中でもほとんどがこの屋内土坑内からわずかながら焼土塊も混ざって出土した。北東隅の検出面で炭化物が集中する。貼り床は明瞭ではなかったが、地山に近似する層を除去したところ約5cm程度の厚さであった。貼り床除去後にピットを検出しているが、掘方は平面も深さも小さく、主柱穴としては判然としないものであるが、西側の7号溝に切られる部分に対応するピットが本来あった可能性もある。また、炉跡は確認できなかった。

出土土器（図版30、第28図8・9）

8は土師器壺の口縁部である。口縁部がわずかに開いて上方へ直線的に立ち上がる直口壺で、肩部は張らない。9は土師器小型広口壺で、やや粗製なつくりで、胴部内面は粗いケズリが施される。底部は、胴部より上位よりも著しく厚みがある。

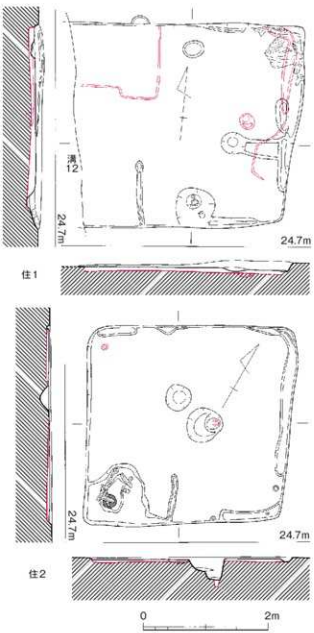
第17図　4区遺構配置図（1/250）

2号竪穴住居跡（図版 19、第 18 図）

4 区－ 2 の中央より東寄りの南端に位置する。一辺 3.2 ～ 3.3m を測る平面方形で、検出面から床面まで 2.3cm 程度のわずかしか遺存していない。周壁溝が断続的ながら、南西側以外の壁で見られる。また、南隅付近が、最も深くて 15cm 程度床面より下がり、下位から炭化した木質やサヌカイト石核が出土した。中央付近でピットが 2 基確認され、内 1 基は床面より 45cm 程度の深さで、主柱穴となり得るが、他に対応するような主柱穴を確認することはできなかった。貼り床は明瞭ではないが、床面直下で地山に近似する層を貼り床と考えると厚さは 5cm 未満である。

出土土器（図版 30、第 28 図 10 ～ 12）

10 は土師器小型丸底壺で、口頸部は欠失する。球状に近似した形状で、残存部の器壁は 4 ～ 5mm で全体的に大きな差異はない。11 は土師器短頸壺の口縁部小片で、器表は強く摩滅する。12 は土師器甕の口縁部である。器表の摩滅は激しいが、口唇部は煤の影響か黒色化している。



第 18 図　4 区 1・2 号竪穴住居跡実測図（1/60）

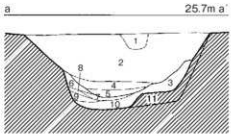
(2) 溝

3号溝（図版 20、第 19 図）

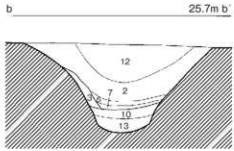
4 区－ 1 に位置し、その南東隅から北西隅に亘る軸で直線的に延びる。南東側は、そのまま 2 区－ 1 から連続しており、北西側は調査区外の巨瀬川の方向へと延びる。検出面での幅は概ね 2.0m 前後である。壁の立ち上がりは、上位で緩やかであるが、下位で急な傾斜となる傾向にある。底面の標高は、北西側へ低くなる傾向にある。埋土は、上層でしまりのよい暗茶褐色、暗褐色土系のもので厚く、一括して埋没したと考えられる。下層では掘り返しを窺わせるような堆積が見られ、最終段階の底部では暗茶・黒茶褐色系のややしまる堆積土で、その前段階となる最下層では、粘性のやや強い黒灰、黒褐色系の堆積土が見られる。

出土土器（図版 30、第 28 図 13）

13 は弥生土器甕で、口縁部は断面三角形状で上端部外面に貼りついて廻り、胴部には沈線が 1 条廻る。底部は厚みがあり、外底部中央はやや上方へせり上がって窪んだ状態となる。接合状態は良好ではないが、完形に復元できる。

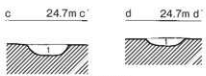


1. 黒茶褐色土　しまりが非常に強い　別遺構か
2. 暗茶褐色土　非常にしまりが強い
3. 黄茶褐色土　濁りが強く、ややしまる
4. 暗茶褐色土　しまりよい　2よりやや暗い
5. 暗茶褐色土　ややしまりがあり、ラミナを形成する　4より暗い
6. 淡黄褐色土　地山に非常に近いが、わずかに濁る



7. 黒茶褐色土　やや粘性が強い
8. 淡黄褐色土　6とほぼ同一
9. 淡黄褐色土　8よりやや濁る
10. 黒灰褐色土　粘性がやや強い
11. 淡黄褐色土　地山崩りすぎ部分
12. 暗褐色土　しまりよい
13. 黒褐色土　10に近似。地山を多く含む

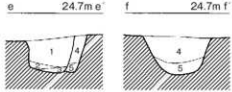
溝3



1. 黒褐色土

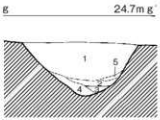
溝10

溝11

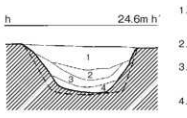


1. 暗茶褐色土　しまりよい
2. 黒茶褐色土　3よりやや明るい
3. 黒茶褐色土　2よりやや暗い
4. 暗茶褐色土　1より明るい
5. 黒茶褐色土　3より暗い

溝13・14

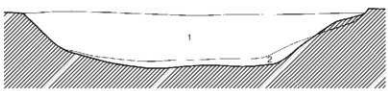


1. 暗茶褐色土
砂質であり、粒子が大きい
2. 淡黒灰色土
砂質であり、濁りが強い
3. 灰褐色土
粘質であり、濁りが強い
4. 淡黄白色土
地山に近いがやや濁る
5. 淡黄白色土
地山に近い。4より濁りが強い

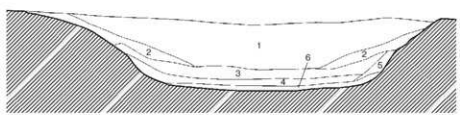


1. 黒茶褐色土
やや砂質であり、しまる
橙黒色砂粒を多く含む
2. 黒灰褐色土
シルト質
3. 暗灰褐色土
やや砂質であり、濁る
橙色砂粒等を含む
4. 灰褐色土
やや粘質であり、非常に濁りが強い

溝12



1. 淡黄褐色土
地山の灰褐色土が少量混じる
2. 灰褐色土
粘性がややあり、ラミナを形成する



2m

0

1. 暗灰色土　シルト質
2. 暗灰色土　シルト質であり、橙灰色粘土ブロックが少量混じる
3. 灰色土　粘性があり、橙灰色粘土ブロックが少量混じる
4. 黒灰色土　粘性あり
5. 暗灰色土　シルト質であり、橙灰色粘土ブロックが少量混じる
6. 黒灰色土　粘性があり、橙灰色粘土ブロックが少量混じる

第 19 図　4 区 3・10 ～ 14 号溝土層実測図（1/40）

10号溝（図版20、第19図）

4区－2に位置し、ほぼ南北軸で直線的であり、北側では調査区外へ延び、南側でも調査区外へ延びるが、その南の延長上の4区－3では検出されていないため、その途上で途切れると見られる。また、11号溝を切る。底面の標高は概ね北に向かって低くなる傾向で、北端部で急激に低くなる。そのため、検出面からの深さは、南端部での5cmに至らないが、北端部では30cm近くになる。検出面での幅は、概ね0.4～0.5mで、埋土は、暗灰褐色系で単一の層からなる。

出土土器（第28図14・15）

14は焼き締めによる陶器擂鉢で、内面に密に擂目が見られる。15は染付碗の口縁部小片で、下端にわずかに数条の文様が残る。

11号溝（図版21、第19図）

4区－2・3にまたがり、4区－2の西側、4区－3の東側の位置に当たり、北西－南東の方向軸で直線的に延びる。10号溝に切られるとともに、北西側が調査区北壁付近で12号溝に切られるが、本来は調査区外の巨瀬川の方向へ延びていたと考えられる。南東側は、地形が南側で落ち込んで、検出面で地山が途切れる位置で遺構自体も途切れる。検出面での幅は、概ね1.2m前後で、壁の立ち上がりはやや緩やかな傾斜である。床面の標高は、全体的に目立った高低差やその変化の傾向は見られない。埋土は、全体的にやや砂質傾向の層が多く、上層で一括して埋没したような、黒茶、暗茶褐色系のやや厚い層があり、下層では黒灰褐色系や灰褐色系で粘質傾向のものや地山に近似した層が見られる。

12号溝（図版21、第19図）

4区－2・3にまたがり、それぞれの西側に位置し、ほぼ南北軸で直線的に延び、北側は調査区外へ延び、南側では地形が南側で落ち込んで、検出面で地山が途切れる位置で遺構自体も途切れる。11・14号溝を切り、検出面での幅は4m前後が主体であるため、壁の立ち上がりは緩やかな傾斜ではあるが、下端の幅は2m以上である。埋土の様相や遺構の切り合いから、新しい時期の遺構であるとともに、遺物の出土もなかったため、掘削は4区－2・3で各1箇所でのトレンチに留めている。埋土は、上層に厚い淡黄褐色土や暗灰色土の層が堆積し、短期間で埋没したと考えられる。一方で、下層では灰褐色、暗灰、黒灰系の粘性のやや強い層が薄く堆積する。

13号溝（図版21、第19図）

4区－3内の西側に位置し、西北西－東南東に近い軸でやや弧状に延び、さほど直線的ではない。西側では、地形が南側へ落ち込んで、検出面で地山が途切れる位置で遺構自体も途切れる。また、東側ではほぼ平行するような14号溝に切られ途切れるが、その先で南及び東へ地形が落ち込んでいく範囲で、他の遺構と同様に連続していないので、元々地形が方々へ落ち込む間の狭い範囲を結ぶ溝であったと考えられる。検出面での幅は0.5～0.8m程度で、検出面からの深さは0.4m程度で、埋土は、上層で暗茶褐色土、下層で黒茶褐色土の2層からなる。

14号溝（図版21、第19図）

4区－3内の西側に位置し、溝の軸は、ほぼ東西に近いが、やや西側が北、東側が南に振れる。西端では南方向へ方向を変えつつ途切れ、東側で、ほぼ平行に近い軸で通る13号溝を切り、12

号溝に切られて途切れる。12号溝を越えた範囲に広がる地形の落ち込み中の埋土で、その延長部分は検出されなかった。一方で、西側の地形の落ち込み中の埋土中で、13号溝は途切れるのに対し、14号溝はわずかに、その上にも遺構が続く。壁の立ち上がりはやや急傾斜で、上層で暗茶褐色、下層で黒茶褐色の埋土である。

(3) その他の出土土器類（第28図16～18）

16は、検出時に出土した弥生土器甕の口縁部から胴部にかけての破片で、外方に突出する端部は欠失しており、その下方に1条の沈線が廻る。17は、清掃時出土の須恵器無蓋高坏の坏部で、外面に2条の浅い沈線が廻る。18は清掃時出土の磁器碗の小片で、見込み、体部下位に文様わずかに残る。

3　4区小結

4区で個別に報告した遺構は、1・2号竪穴住居跡、3・10～14号溝である。

竪穴住居跡はいずれも平面方形で、屋内土坑を備え、主柱穴を明瞭なものとして把握することはできなかった。それぞれの出土土器は僅少であるが、ともに古墳時代の土師器小型丸底壺が出土しており、1号竪穴住居跡では、粗製化していることから中期の範疇で、一方で2号竪穴住居跡は、大きく欠失するが器壁が薄く、前期の範疇と考えられる。また、2号竪穴住居跡ではサヌカイト石核が出土していることから、この段階でも石器利用をしていた可能性を窺わせる。住居跡の所在する地点の基盤層は、各調査区の中でも特にしっかりした地盤であり、居住に適したものであったと想定される。

3号溝は2区から続き、図示できる遺物はわずかであるが、弥生時代中期初頭である。ここで言及しておくべきは、11号溝について、図示できる出土土器はないが、数少ない出土した小片は弥生土器で、3・11号溝の方向軸がほぼ平行する点である。また、両者は掘方や埋土も近似することから、併存した可能性が考えられる。また、13号溝は、出土土器を伴わず、12号溝に切られて、わずかしか遺存していないが、方向軸が3・11号溝と近似しているため、関連する可能性がある。

10・12号溝は、規模や埋土は著しく異なるが、本遺跡は、現在にも地割が残る条里遺構の中に所在し、両溝の方向軸にほぼ沿うため、ともに条里と関連して、もしくは規制を受けて掘削されたと考えられる。10号溝からは陶磁器類が出土し、12号溝でも図示していないが、施釉された陶器が出土し、近世以降の所産と考えられる。14号溝は、12号溝を切るとともに、12号溝が途切れる地形の落ちに堆積する埋土を切る点と、中世以降の所産と見られる土師質の土器片が出土する点に言及できるのみである。

6.　5区の調査

1　5区の概要

5区は前調査区中の中央部からその南側にかけての位置に当たり、東西に流れる既存の水路によって5区－1（北側）と5区－2（南側）に分かれ、東側で1・2区と接し、北もしくは西側で4区と接する。5区－1（3,612㎡）と5区－2（2,487㎡）を合わせて、6,099㎡の調査面積である。

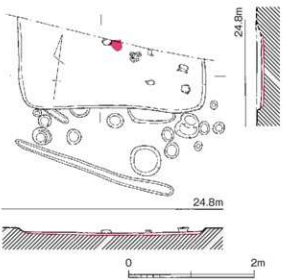
3号竪穴住居跡、1号掘立柱建物跡、1・7・14～17号溝が検出されており、ピットは北端と西端で著しく希薄で、他でも非常に希薄ながら全体的に広がる。1号溝は1区から連続し、7号溝は2区から連続する。17号溝は、5区－1・2間でまたがる。また、複数の倒木痕が見られる。

検出面の標高は、5区－1北端の15・16号溝付近が最も高く、標高24.6m前後であり、4区に

第 20 図　5 区遺構配置図（1/300）

繋がる西側へは 24.3 ～ 24.5m 程度へ緩やかに低くなる。南側へは更に低くなり、5 区－ 2 南端付近で 23.8m 程度と南北で最大 80cm程の高低差がある。

基本的な層序としては、15 ～ 20cm程度の耕作土・床土が上層にあり、その下位では砂質土がわずかに混ざる灰色系の粘質土を主体とする幾層が堆積する。北端付近では、3 ～ 4 層の灰色系粘質土層が 20 ～ 30cm程度の厚さであり、地表下 40cm程度で基盤層となり、南端付近では、灰色系土層の中に挟まる 20cm程度の淡黒褐色粘質土層が見られ、地表下 80cm程度で基盤層となる。基盤層は、北側では黄褐色粘質土で、低くなる南側になるにつれて、粘性がより強くなるとともに白みが強く明るくなる傾向にある。



第 21 図　5 区 3 号竪穴住居跡実測図（1/60）

2　遺構と遺物

（1）竪穴住居跡

3 号竪穴住居跡（図版 23、第 21 図）

5 区－ 1 の調査区北端に位置し、北側はコンクリート溝によって半分ほどを切られる。全体に削平を受けているため、残りは良くない。規模は長軸 2.7m、短軸 1m 以上、深さ 0.1m の隅丸方形住居である。慎重に埋土を除去したが、貼床の識別は困難であった。ただし、地山がやや濁った層が埋土直下に存在し、これが床面であると考えられる。この床面でピット等の主柱穴に関連する遺構は検出できなかったが、床面の北側中央に約 10cm の範囲で焼土と小礫を検出し、これが炉跡になるものと思われる。床面から 2 ～ 3cm 程度直下に掘削すると明瞭な黄褐色の地山が検出されたが、地山からは周壁溝、ピット等の住居に関連する遺構は検出されなかった。また、住居跡周辺からはピットや小規模の溝などが検出され、当遺構と関連するものであると考えられるが、周辺遺構の時期は不明である。埋土は暗灰褐色砂質土である。

出土土器（図版 31、第 28 図 19 ～ 22）

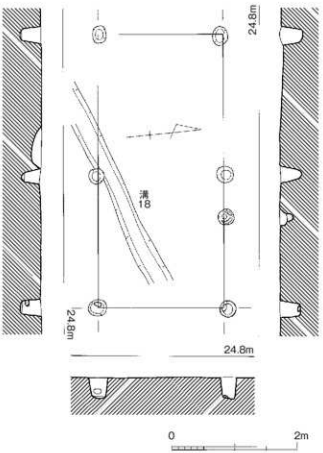
19 は小形の土師器甕。口縁部はやや外反するが、ほぼ直立して立ち上がる。外面に一部ハケ目が残る。20 は土師器高坏脚部片である。末端部内面はやや綾をもっているが、裾部との境界は不明瞭である。底径 12cm を測る。21 は土師器高坏脚部片である。ハの字状に広がり、内外面に綾をもたず、裾部との境界は不明瞭である。外面ハケのちミガキ、内面上部はナデ、下部はケズリによって調整される。22 は土師器高坏脚部裾片である。内面末端部に綾をもって、やや屈曲気味に広がる。

（2）掘立柱建物跡

1 号掘立柱建物跡（図版 23、第 22 図）

5 区－ 1 の調査区南西端に位置する。規模は 1 × 2 間の側柱建物で、柱間の心々距離で桁行 4.6m、梁行 2.1m である。当初は掘立柱建物跡になることに気付かず、個々のピットとして掘削したため、平面・断面での柱痕跡はいずれも確認できていない。本遺構は径 0.2 ～ 0.5m、深さ 0.3m 前後のピットで構成される。北東のピットの底部壁際と南東のピットの底部付近の壁際から拳大の河原石（円礫）

が検出されたが、柱を補強する目的で配置されたものだろうか。詳細は不明である。また、北側中央のピットの東にはテラスを持つやや浅いピットが検出されたが、他のピットと比較するとやや浅く規模も小さい。ただし、このピットの中心軸は、他のピットの中心軸とほぼそろっているため、建物跡に関連するものと考えられる。方位は北より5°西に傾く。柱穴の埋土は暗褐色砂質土である。



第22図　5区1号掘立柱建物跡実測図（1/60）

(3) 溝

1号溝（図版24、第23図）

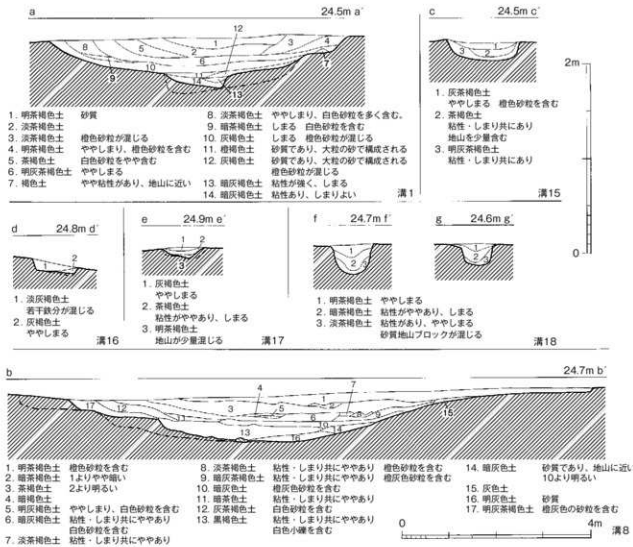
5区－2の調査区の北寄りに位置し近世から近代の暗渠に一部切られる。西端は調査区外へ、東端は1区に向かって延びる溝であり、西側の収束点は不明である。東西45mにわたって検出した。規模は上端幅1.5～4.2m、下端幅0.9～1.5m深さ0.6～0.8mである。調査区西側で上端幅が大幅に大きくなることが特徴的である。溝中段に幅の狭いテラスがあり、テラスからほぼ垂直に下端に向かって落ちる。溝西側に20cm程度レベルが低くなる箇所があり当初は別遺構との切り合いであると考えたが、埋土に大きな違いが見られないことから、同一遺構内のレベル差であると判断した。比較的水捌けのよい土質ではあるが、当該箇所のみ急激に下に落ちることから、滞水するための施設だったと推測できるのではないだろうか。また、底面はフラットであり、位置による大きなレベル差は上記を除いて見られない。埋土は暗褐色粘質土である。土層断面a－a'からみると、11層から砂質土になっており、溝の幅も狭くなっている。

出土土器（図版31、第28図23～26）

23～26は弥生土器片である。23は壺底部片である。底径7.5 cmを測る。内外面共に摩滅しているが、外面はヨコナデで調整されているようである。24・25は甕口縁部片である。24は粘土を貼り付け、断面逆L字型に近い形に成形されている。調整は不明である。25は粘土を貼り付け、断面三角形に成形しその後キザミ目を施す。外面ヨコナデで調整される。26は甕底部片である。底部末端部を欠損する。外面縦方向のハケ目、内面はナデにより調整される。また、内面には黒斑が認められる。23から25は地山付近の埋土から、26は埋土上層から出土した。

8号溝（図版24、第23図）

5区－1の調査区中央を東西に延びる大溝である。西端は4区－3の落ち部に、東端は2区1に向かって延びる。規模は上端幅7～10m、下端幅4～5m、深さ1.1mを測る。このように非常に大型の溝であるため、トレンチ掘削にとどめ、土層観察を行っている。トレンチ掘削部では、溝の底面はフラットに近い。溝北側は肩部が明瞭でなく、底部に向かってなだらかに落ちている様子で



第 23 図　5 区 1・8・15 ～ 18 号溝土層実測図（8 号溝のみ 1/80、他は 1/40）

ある。これは 2 区－ 1 の 8 号溝の土層堆積状況と同じ様子である。また、土層観察の結果から、埋土はほぼ水平に堆積しており、人為的に埋め戻す、あるいは掘り返された様子はないようである。埋没時期を確実に特定できるような遺物は出土しなかったが、溝埋土上面から弥生土器や須恵器、剥片石器等が出土した。反対に溝底部付近で遺物は全く出土しなかった。本溝は、4 区 3 の落ち部につながり、また他の溝との切り合い関係が明瞭でないことから、古くから機能していた溝（ないし落ち）が繰り返し利用され、他の溝はこの大溝に流れ込むように掘削されたものと推測できる。

出土土器（第 28 図 27 ～ 31）

いずれも溝上面からの出土資料で土師器である。27・28 は高坏坏部である。いずれも脚上端に粘土を充填して坏部と接合したことがわかる資料である。両資料共に摩滅が激しく調整は不明である。29 ～ 31 は高坏脚部である。29 は内面のしぼり痕が明瞭に観察される。30 は坏部との接合方法が明瞭でなく、摩滅が著しいため調整は不明である。31 は裾部であるが、末端部に綾をもち水平に広がる。内面にひねり痕が見られ、外面は部分的に二次焼成を受けているようである。

15 号溝（図版 25、第 23 図）

5 区－ 1 の調査区東側に位置し、西端は 4 区－ 3 の落ちに、東端は 8 号溝に延びる溝である。長

さ 12m にわたって南東に向かって弧を描きながら延びる。規模は上端幅 0.8m、下端幅 0.6m、深さ 0.2m を測る。8 号溝との切り合い関係は明瞭でなく、8 号溝とほぼ同時併存の遺構と考えてよいだろう。底面はほぼフラットであるが、4 区 3 の落ち部(西側)に向かって底面のレベルが徐々に低くなっていくことがわかる。埋土はほぼ水平に堆積している。

16 号溝(図版 25、第 23 図)

5 区－ 1 の調査区北側に位置する。16 号溝と並行して東西 48m に亘って延びる溝である。東端は 2 区 1 に延び、西端は削平によって切られるため、収束点は不明である。規模は上端幅 0.5m、下端幅 0.4m、深さ 0.1m を測る。底面はフラットであり、地点によって大きなレベル差はない。埋土は南に向かってやや斜めに堆積しているが、これは削平が原因であると考えられる。また、灰褐色の脆い埋土であり時期的にそれほど古くはない溝であると思われる。

17 号溝(図版 25、第 23 図)

5 区－ 1 の調査区北側に位置する。15 号溝と並行して東西 48m に亘って延びる溝である。東西端は削平によって切られるため、収束点は不明である。規模は上端幅 0.4m、下端は 0.2m、深さ 0.1m を測る。底面はやや丸みを帯び、位置によって大きなレベル差はない。埋土はほぼ水平に堆積している。16 号溝と同様に灰褐色の脆い埋土のため、時期的に古くない溝であると思われる。

18 号溝(図版 25、第 23 図)

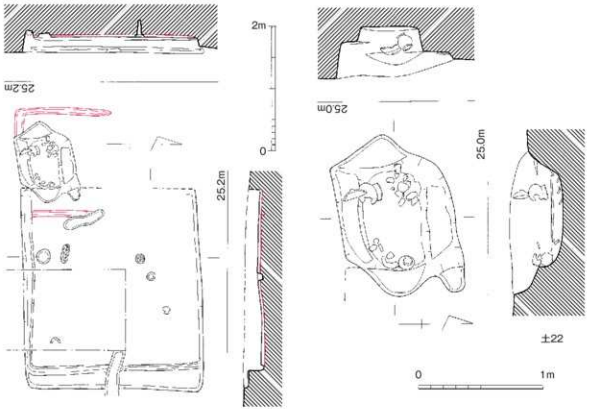
5 区－ 1 の調査区南端に位置する。西端は調査区外に、東端は 5 区－ 2 に延びる。弧を描きながら東西 24m に亘って延びる溝である。規模は上端幅 0.4m、下端幅 0.2m、深さ 0.3m を測る。底面はフラットであるが、東側に向かって底面のレベルが徐々に低くなっていることがわかる。埋土は暗褐色砂質土である。

3　5 区小結

5 区では竪穴住居跡 1 棟、掘立柱建物跡 1 棟、溝 6 条を検出した。他調査区と同様に削平が著しかったものの、5 区－ 1 の 3 号竪穴住居跡からは古墳時代前期中頃の土師器が出土している。3 号竪穴住居跡は 4 区－ 2 と同様、巨瀬川南の自然堤防上に位置しており、当時の住居配置のパターンを表しているものと思われる。また、5 区－ 1 の調査区を東西に流れる 8 号溝上面からは、細片であり図示できないものの古墳時代中期頃の土師器や須恵器などが出土しており、少なくとも古墳時代中期以降に埋没が開始した溝であるということがわかった。また、5 区－ 1 の 15 号溝については、出土遺物こそ確認できないものの、8 号溝との切り合い関係が不明瞭であり、8 号溝に合流する形で掘削されているため、ほぼ同時期と考えてよいだろう。5 区－ 1 の 16 号及び 17 号溝は、他の溝と比較すると相対的に埋土がしまらず、深さもそれほどないため新しい時期のものである可能性が高い。他の溝については図示可能な遺物がなく、また遺物も細片であることから埋没時期は不明である。

また、5 区－ 1 調査区南側で検出した掘立柱建物跡からは、時期の特定できる遺物は出土しなかったが、1 間× 2 間という建物の規模から考えるに弥生時代の所産と推測される。さらに 5 区－ 2 の 1 号溝の底付近の埋土からは城ノ越式土器が出土しており、少なくとも弥生時代中期初頭から中期前半にかけて当該溝の埋没が開始したものと理解できる。このような掘立柱建物と溝から弥生時代の集落が存在していた可能性があるが、大幅な削平によって失われていると考えられる。

第 24 図　6 区遺構配置図（1/300）



第 25 図　6 区 4 号竪穴住居実測図及び 22 号土坑実測図（住居跡は 1/60、土坑は 1/30）

7. 6 区の調査

1　6 区の概要

6 区は全調査区中で北東端に位置し、道路を挟んで飛び地となっている。南側は遺構が途切れたところで区切り、西側は堤防上の道路で区切られて三角形状の形状で 2,933㎡を測る。4 号竪穴住居跡、21 号土坑、18 ～ 27 号溝が検出された。調査区のほとんどが田として利用されていたのに対し、北東隅の部分のみは畑地利用されていたため、削平の影響が少ない。よって、全体的に標高 24.4 m 程度であるのに対し、その範囲は 25.0m 程度となっている。そのため、該当部分が際立って遺構の残存状況が良好であり、竪穴住居跡もその範囲で検出され、低い部分では大型の溝以外は、非常に遺構が希薄で、ピットも南西隅にわずかに広がるのみである。

基本的な層序については、削平の少ない範囲では、各 10㎝程度の耕作土、床土の直下の地表下基盤層となり、低い範囲では表土・床土の下に、場所によりやや様相の異なる黄茶褐色系、黄灰褐色系の砂質土の混ざる粘質土主体の複数層が堆積し、地表下 40 ～ 60㎝程度で基盤層に至る。標高の低い範囲で確認される基盤層は灰茶褐色砂質土で、高い位置で残る基盤層は黄灰褐色砂質土である。

2　遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

4 号竪穴住居跡（図版 27、第 25 図）

調査区北東端に位置し、北側は現水路によって削平される。南西側は 22 号土坑に切られる。住居西側は削平が著しく、プラン・床面共に検出はできなかった。規模は長軸 4.4m 以上、短軸 3m 以上、深さ 0.3m の隅丸方形住居である。暗褐色の埋土を除去していくと、濁った黄褐色層が検出され、

これが住居床面であると考えられる。住居内東側は高さ 20cm のテラス状になっているが、幅 0.4m とかなり幅が狭いため、ベッド状遺構にはならないだろう。また、住居跡の周縁には床面から深さ 0.1 m程度の周壁溝が廻る。住居床面から地山まで掘り下げていく過程で、22 号土坑西側にも周溝が検出され、住居周壁溝の続きであると確認した。周壁溝は南側・東側では切れないため、住居入口は北側か西側ということになろうか。主柱穴については、床面でいくつかピットが検出されたものの、全く規則的に並ばないため不明である。炭化物や焼土が検出されたものの、削平が著しいため炉跡となるかどうかの判断はできなかった。また、床面下の地山からは周壁溝以外の遺構は検出されず、住居跡周辺にも溝以外の遺構が見られなかった。埋土は暗褐色砂質土を基調とする。

出土土器（図版 31、第 29 図）

1・2は土師器である。1は小型丸底壺である。口径 8.5cm、胴部最大径 10.3cm を測る。体部が球形で、頸部がしまり口縁部径は胴部最大径よりも小さく直線的にのびる。外面はハケ目調整が認められる。2は高坏脚部片である。内面に綾があり、そこからやや外屈気味に広がる。内面ナデにより調整される。

(2) 土坑

22 号土坑（図版 27、第 25 図）

調査区北東に位置する楕円形の土坑であり、4 号竪穴住居を切る。規模は長軸 1.3m、短軸 0.9m、深さ 0.4m を測る。埋土は暗茶褐色粘性土であり、土層の観察から人為的に埋め戻したような明瞭な痕跡は見られなかった。土坑中段にテラスがあり、テラスから底面に向かってやや急に落ちていく。土坑西側から出土した土器は地山から浮いており、埋土中からの出土である。これは、土坑の西側底面がテラス状になっており、これに沿う形で土器と土が埋没したためと想定される。遺構検出時は、22 号土坑が 4 号竪穴住居跡を切っているものと想定し掘削したが、土坑西側から 4 号竪穴住居周壁溝の続きと思われる溝が確認されたため、住居と同時併存の屋内土坑である可能性も十分に考えられる。

出土土器（図版 31、第 29 図）

3 ～ 5 は中型の土師器壺であり頸部がよくしまる。3 は口縁部が短く斜めに立ち上がり口唇部はやや丸みを帯びる。内面はナデおよびケズリによって調整される。4 は 3 よりも口縁部が短く斜めに立ち上がる。同部は均整な球形であり、口径より同部最大径の方が大きい。外面ハケ目調整、内面ナデ及びケズリによって調整される。5 は脚付の中型壺である。口縁部は斜めに立ち上がり、胴部はややつぶれて扁平な形状である。外面ハケ目調整、内面ハケ目及びナデによって調整される。6 ～ 8 は土師器高坏坏部である。6・7 は口縁が直線的にのびる。6 は口唇部が比較的シャープであり、内外面共にナデ調整が観察される。7 は口唇部がやや丸みを帯びる。内外面共にナデによって調整される。8 は内外面共にナデ調整が観察される。

(3) 溝

19 号溝（図版 28、第 26 図）

調査区北東に位置する。東西方向に直線的にのびる溝であり、8m に亘って検出した。東端は調査区外に延び、西端は削平されている。規模は上端幅 1m、下端幅 0.5m、深さ 0.5m を測る。底面は丸みを帯びており、位置による大きなレベル差はない。埋土は茶褐色砂質土であり、ほぼ水平に堆積している。

20 号溝（図版 28、第 26 図）

調査区北東に位置する。東西方向に直線的にのびる溝であり、8m に亘って検出した。東端は調査区外に延び、西端は削平されている。ピットや攪乱坑に切られる。規模は上端幅 0.8m、下端幅 0.5m、深さ 0.4m を測る。規模・延びる方向共に 18 号溝と近似している。断面は逆台形状になるものの、底面は丸みを帯びている。b － b′ 付近の約 40cm の範囲で、30cm 程度レベルが低くなる箇所があるが、埋土の観察からは別遺構との切り合いによるものとは考えにくい。埋土は茶褐色砂質土であり、水平に堆積している。

21 号溝（図版 28、第 26 図）

調査区北東に位置する。東西方向に直線的にのびる小規模の溝であり、8m に亘って検出した。東端は調査区外に延び、西端は削平されている。規模は上端幅 0.4m、下端幅 0.2m、深さ 0.2m を測る。断面は均整な逆台形状であり底面はフラットである。埋土は茶褐色砂質土であり、水平に堆積している。

22 号溝（図版 28、第 26 図）

調査区北東に位置する。北西－南東方向に延びる小規模の溝であり、西端及び東端は削平されており、収束点は不明である。規模は上端幅 0.3m、下端幅 0.2m、深さ 0.3m を測る。底面はフラットである。埋土は暗茶褐色砂質土である。

23 号溝（図版 28、第 26 図）

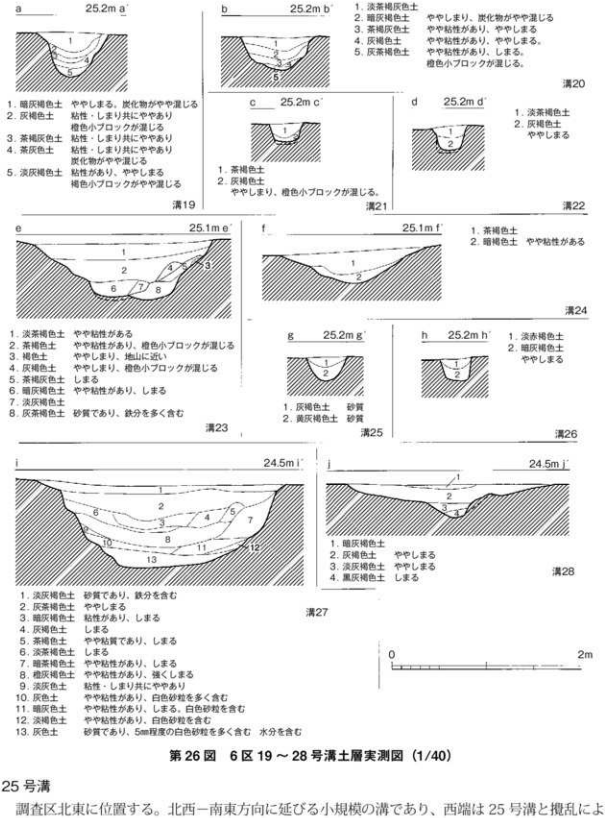
調査区北東に位置する中規模の溝である。北西－南東方向に延びる溝であり、東端は削平され、東側は調査区外であるため、収束点は不明である。本遺構が調査区西側の削平箇所にもかろうじて残存し、調査区北西部まで延びていたことから、その他の溝についても本来は西側まで延びていたことが推測できる。規模は上端幅 2m、下端幅 1m、深さ 0.6m を測る。土層断面を観察した結果、底面付近で二つの溝による切り合い関係がみられた。つまり、灰茶褐色砂質土を基調とする 3・4・5・8 層が、暗灰褐色弱砂質土を基調とする 1・2・6・7 層に切られている。これら二つの溝の底面のレベルはほぼ同一であり、且つ遺構検出面では二つの溝の切り合いは見られなかった。したがって旧い溝の埋没後ないしは崩壊後、それほど時間を置かずに新しい溝の再掘削を行ったものと考えられる。底面はやや丸みを帯び、位置によるレベル差はない。

出土土器（第 29 図）

9 は土師器の中型壺である。口縁部は短く斜めに延び、頸部は断面く字状である。口径と胴部最大径がほぼ同じ大きさである。外面ハケ目調整、内面ハケ目のちナデ調整である。

24 号溝（図版 29、第 26 図）

調査区北東に位置し、北西－南東方向に延びる小規模の浅い溝である。北端は攪乱によって切られ、南端は収束しているものと思われる。規模は上端幅 1.5m、下端幅 0.7m、深さ 0.3m を測る。断面形態はやや擂鉢状になる。南東から北西にかけてレベルが低くなっていることと、南側が収束していることから、北西に向かって溝が延びていたものと考えられる。埋土は灰褐色砂質土を基調とし、水平に堆積している。



第 26 図　6 区 19 ～ 28 号溝土層実測図（1/40）

25 号溝

調査区北東に位置する。北西－南東方向に延びる小規模の溝であり、西端は 25 号溝と攪乱によって切られる。上端幅 0.4m、下端幅 0.2m、深さ 0.2m を測る。断面 q － q' の部分は船底状の断面形態だが、その他の部分は逆台形状である。規模・延びる方向ともに 22 号溝と近似する。底面のレベルは 24 号溝と同様、南東から北西にかけて低くなっている。埋土は灰褐色砂質土である。

26 号溝（図版 29、第 26 図）

調査区北東に位置する。ほぼ東西に沿って延びる小規模の溝であり、22 号溝と攪乱によって切られ、25 号溝を切る。上端幅 0.3m、下端幅 0.2m、深さ 0.2m を測る。断面逆台形状で、底面はフラッ

トである。埋土は暗灰褐色土を基調とする。

27 号溝（図版 29、第 26 図）

調査区中央を南北に直線的に流れる比較的規模の大きい溝である。南北端共に調査区外に延びており、収束点は不明である。北端は調査区北側に流れる巨瀬川に向かって幅が広がりながら延び、南端は調査区外の落ち部に向かって延びている。1 ヶ所をトレンチ状に掘削し断面観察を行った。規模は、上端幅 2.6m、下端幅 0.9m、深さ 0.9m を測る。断面形態は逆台形状であり、底面はフラットである。遺構の検出当初は、規模の大きさや埋土が比較的安定しないことから自然流路の可能性を想定していた。しかし、掘削の結果、肩部がはっきりすることや断面が逆台形状になることから人為的に掘削された溝であると判断した。埋土は灰褐色砂質土を基調とし、ほぼ水平に堆積している。色調に大きな差異はないが、底面付近では砂質土となる。

出土遺物（図版 31、第 29 図 10・11）

10 は土師器の坏である。底径 12cm を測る。摩滅が著しく外面ナデ以外の調整は不明であるが、焼成は良好である。底部はやや丸みを帯びているが平底であり、糸切りの痕跡がわずかにみられる。11 は瓦器椀である。復元口径 17cm、器高 5.6cm である。体部は丸みを帯び、均一な薄さで製作されている。高台の断面は逆台形状である。いずれも 27 号溝のトレンチ内埋土より出土した。

28 号溝（図版 29、第 26 図）

調査区南端の中央よりに位置する小規模の浅い溝である。26 号溝と落ち部に切られる。2 ヶ所をトレンチ状に掘削・断面観察を行い、うち 1 ヶ所で土層の記録を行った。規模は上端幅 2.1m、下端幅 0.2m、深さ 0.4m を測り、上端幅と下端幅の規模の差が大きい。断面形態は漏斗状に近い。埋土は灰褐色砂質土を基調とする。

（4）その他の出土土器類（図版 31、第 29 図 12 ～ 15）

12 は 6 区内確認調査時出土の粗製深鉢の甕形土器片である。口縁部は外湾してのびる。器壁は比較的薄く、内外面共に二枚貝による条痕が施される。13 は 6 区ピット内出土の甕形土器片である。復元口径 30cm を測る。口縁部は如意状を呈し、口唇部全面に刻み目が施される。板付Ⅱ式新段階頃の所産だろうか。14 は 6 区検出面出土の須恵器高台付椀である。器高 2cm、復元口径 10cm、底形 10 cm を測る。高台の高さは低く、皿底端部に取り付けられている点が特徴的である。内外面共に回転ヨコナデと不定方向ナデによって調整される。高台内側には板状工具による痕跡が残る。9 世紀前半頃の所産だろうか。15 は 6 区内確認調査時時出土の縄文土器底部片である。復元底径 15cm を測る。平底ではあるが、やや上げ底気味である。胎土に雲母が多量に含まれる。

3　6 区小結

6 区からは、竪穴住居跡 1 棟、溝 10 条、土坑 1 基、ピット数基を検出した。ピットの中には、弥生時代前期末頃の土器が出土するものが検出された。これ以外に弥生時代の遺構はなく、集落の痕跡を残すものはない。

6 区で検出された竪穴住居跡は、4 区－ 2 及び 5 区－ 1 で検出されたものと同様に巨瀬川南側に位置しており、やはり何らかの住居配置のパターンを共有しているものと考えられる。4 号竪穴住居跡は他の住居跡と同様に削平が著しかったものの、床面直上より頸部がよくしまり、器壁のやや

薄いつくりの小型丸底壺が出土しており、古墳時代前期中頃から後半に埋没したものと考えられる。また、4号竪穴住居跡を切る形で検出された22号土坑も竪穴住居とほぼ同じ時期の土師器が埋土中から出土しており、同時期に埋没したものであると考えられる。また、23号溝の埋土からは古墳時代中期末頃から後期の土師器壺片が出土しており、5区－1の8号溝と同様古墳時代中期以降に埋没した溝が存在している。6区で検出されたこれらの溝群は、図示できる土器がほとんどないものの、東西方向に延び埋土の特徴も共通していることから、ほぼ同じ時期に機能していたものと考えてよい可能性が高い。これらの溝の機能については明確ではないが、どの溝も同じ方向に延びていることから、導水や排水を意図して人為的に掘削されたものと推測できる。

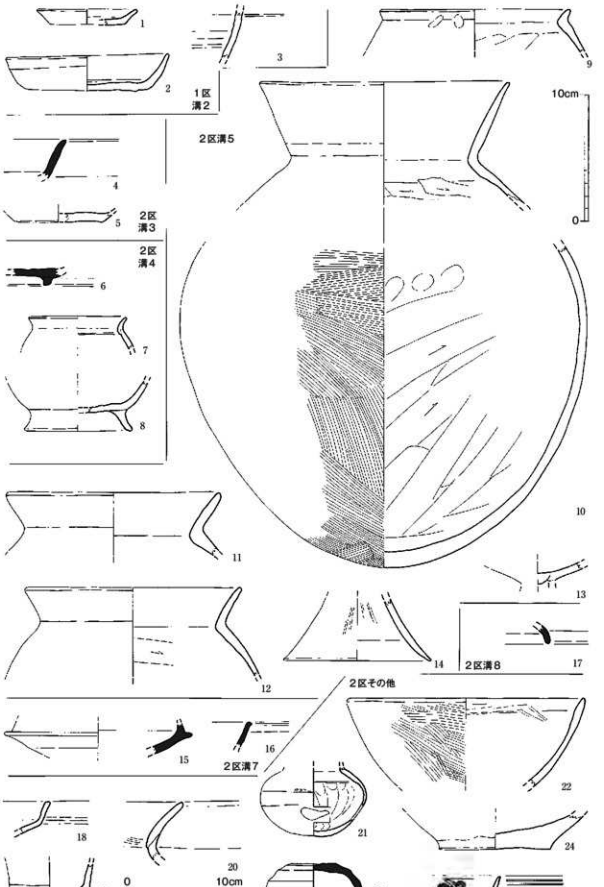
また、調査区を南北にわたって大きく延びる27号溝埋土中からは中世の所産と思われる土師器坏片と瓦器椀が出土した。これらはともに埋土の中層程度より出土したもので、必ずしも溝の機能した時期を表すものではない。27号溝より出土した土師器坏片の時期は、底部に糸切りの痕跡がわずかに見られることから、11世紀後半以降であると考えられる。全調査区の中で27号溝のほかに中世の土器が出土したのは2号溝である。2号溝は1区及び2区－1に位置し、12～13世紀の土師器と12世紀頃の褐釉陶器が出土しており、27号溝と同様に南北に長く延びる溝である。両溝の機能は不明だが、南北にまっすぐ延びる点や条里遺構の中に掘削されている点から、条里地割と何らかの関連がある可能性を指摘できる。

8. 出土石器・土製品及びその他の地点出土陶磁器

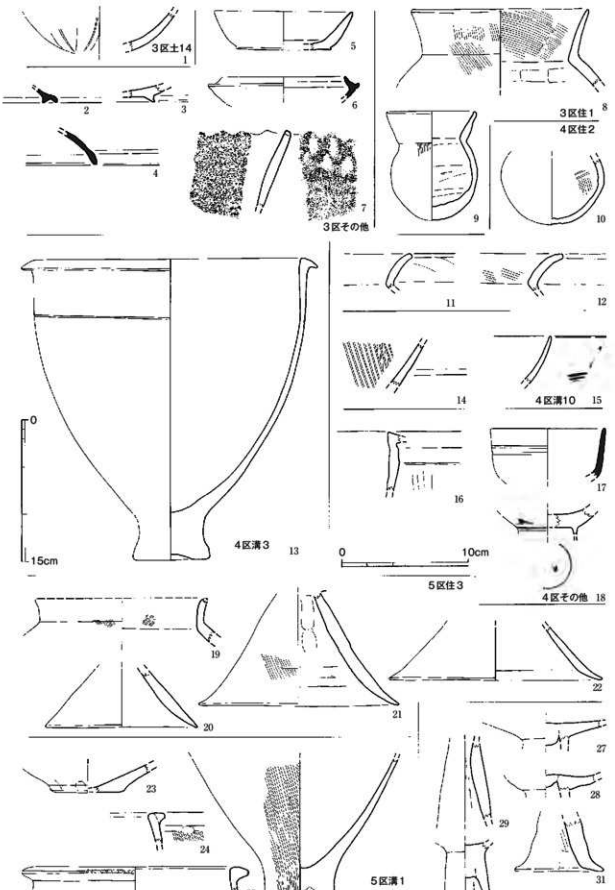
以下では、鷹取ヒゲジロ遺跡の試掘確認調査時及び本調査時に出土した石器、土製品、出土陶磁器について報告する。剥片石器について、腰岳産黒曜石や姫島産黒曜石、安山岩などのチップ・剥片等が少量出土したが、実測に耐えうるものはなかった。

石器・土製品（図版31・32、第29図1～15・30図）

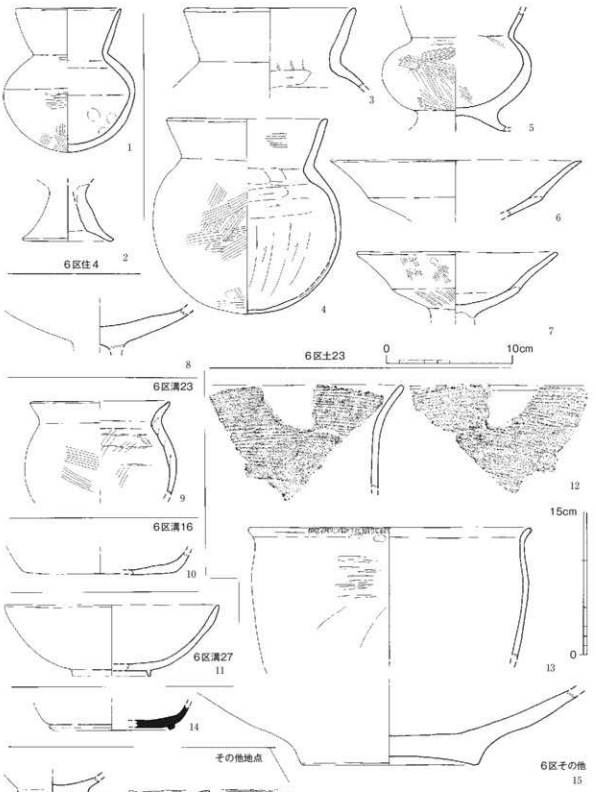
1～7は打製石鏃である。石材は腰岳産黒曜石と安山岩で構成されている。1は2区－3の8号溝出土の凹基式石鏃であり、側縁を鋸歯状に加工している。腰岳産黒曜石製で長さ2.8cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ0.8gを測る。2は2区－3の8号溝上面出土の剥片鏃である。腰岳産黒曜石製で、長さ2.2cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ0.8gを測る。3は3区土坑出土の剥片鏃である。腰岳産黒曜石製で長さ2.2cm、幅1.8cm、厚0.3cm、重さ0.8gを測る。4は5区－1の15号溝出土の凹基式石鏃である。安山岩製で長さ2.1cm、幅1.8cm、厚さ0.6cm、重さ0.8gを測る。脚の末端部が尖らず平坦な作りである。5は2区－3の8号溝出土の微凹基式石鏃である。安山岩製で長さ1.8cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm、重さ0.6gを測る。一枚一枚の押圧剥離が粗く、基部の抉りも浅いことから縄文時代晩期以降の所産と考えられる。6は5区－1の18号溝出土の微凹基式石鏃である。安山岩製で長さ2.6cm、幅1.7cm、厚さ0.6cm、重さ1.3gを測る。側縁が末端にかけてやや外反するタイプである。7は5区表採の剥片鏃である。安山岩製で長さ2.7cm、幅1.8cm、厚さ0.2cm、重さ1gを測る。8は2区－3の4号溝出土のつまみ形石器である。腰岳産黒曜石製で長さ3.2cm、幅2.4cm、厚さ0.7cm、重さ4.6gを測る。側縁に使用痕と思しき微細剥離痕が残る。9は6区23号溝出土の錐状製品である。安山岩製で長さ5.1cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm、重さ4.8gを測る。側縁部に二次加工と使用痕が残るため、刃器である可能性も考えられる。10は4区－1の検出面出土の石鉢である。安山岩製で長さ3.8cm、幅6.8cm、厚さ0.6cm、重さ18.8gを測る。表裏共に素材剥片の剥離面を活かした作りである。11は6区23号溝出土の石核である。腰岳産黒曜石製で長さ1.7cm、幅2.3cm、厚さ1.7cm、重さ4.5gを測る。打面調整せず、素材剥片のポジティブ面をそのまま利用し、一方向



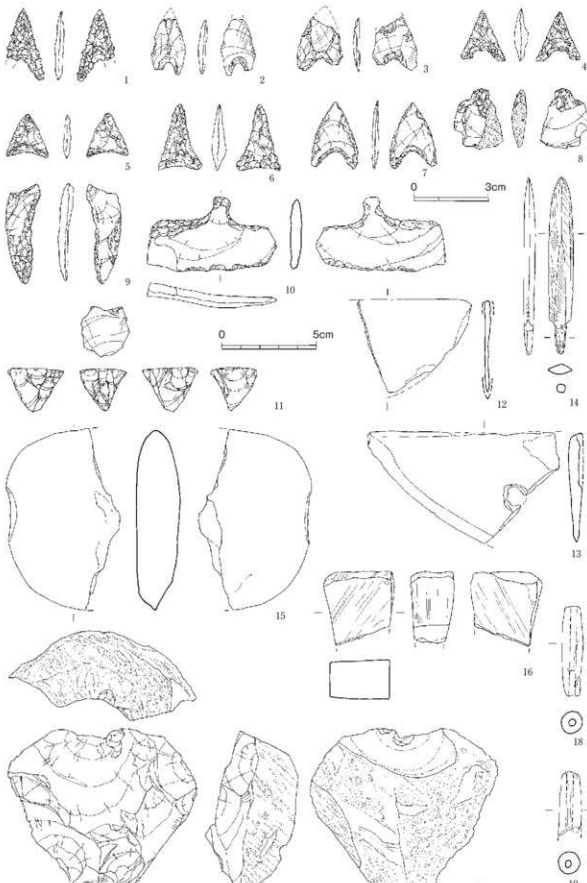
第 27 図　1・2 区出土土器類実測図（18・19 は 1/4、他は 1/3）



第 28 図　3 ～ 5 区出土土器類実測図（13・23 ～ 26 は 1/4、他は 1/3）



第 29 図　6 区及びその他の地点出土土器類実測図（12・13 は 1/4、他は 1/3）



第 30 図　石器及び土製品実測図（1 ～ 7・11 は 2/3、他は 1/2）

の剥離によって小形剥片を剥離したようである。12・13は石包丁である。12は、5区－2の1号溝出土で、著しく欠損し、刃部と背の部分のラインは、概ね本来の形状と同一と言えるが、両面が全体にわたって剥離するなど、ほとんど原形を留めていない。片岩製で、残存する法量は、長さ6.1㎝、幅4.9㎝、厚さ0.4㎝で重さ12を測る。13は2区－2の7号溝出土で、欠損が著しい。背の部分は端部付近しか残っていないが、背に向かってやや厚みを増す断面と想定され、また、刃部に向かっては両面からほぼ均等に薄くなる断面である。部分的に残る孔は、やや歪な形状である。片岩製で、残存する法量は、長さ10.1㎝、幅5.7㎝、厚さ0.6㎝で重さ41gを測る。14は磨製石鏃もしくは磨製石剣で、2区－1の4号溝出土である。刃部は丁寧な研磨により形成され、整った形状である。鏑は身の上半では確認できるが、下半では不明瞭となる。関付近の両側刃部で5～6箇所に細かい抉りが施される。その抉りは、柄への緊縛を強固にする機能のためという可能性も想定されるが、付近の刃部で明瞭な面取りがされていないため、判然としない。全長9.4㎝、幅1.5㎝、厚さ0.6㎝で重さ7gを測る。15は2区－2の4号溝と7号溝の交差部より出土した打ち欠き石錘である。砂岩製で長さ9.6㎝、幅5.7㎝、厚さ2.2㎝、重さ214gを測る。半分を欠損する。16は1区2号溝出土の砥石である。凝灰岩製で長さ4.9㎝、幅3.7㎝、厚さ2.2㎝、重さ42.8gを測る。下半を欠損する。表面が赤変しているため被熱したものと考えられる。17は4区－2の2号住居出土の石核である。安山岩製で長さ8.7㎝、幅9.8㎝、厚さ4.5㎝、重さ301.5gを測る。作業面以外の面が全て自然面であり、打面調整を行っておらず、同一作業面で打点を回転させながら剥片剥離を行っている。18と19は4区清掃時の出土の管状土錘である。18は完形で全長4.7㎝、径1.2㎝、孔径0.3㎝で、19は半分程度欠損しており、残存長3.4㎝、径1.2㎝、孔径0.3㎝を測る。

その他の地点出土の磁器（第29図16・17）

16・17は、事業用地範囲の東端かつ久大本線の南側隣接地点（第3図参照）の試掘において出土した。ともに中世の所産で、時期的にも近い範囲に収まる可能性があり、同地点は遺構が確認されず、本調査対象外となったが、近隣に遺跡が存在する可能性がある。

16は試掘時出土の白磁碗底部片である。底径4.6㎝で、胎土はきめ細かく焼成は良好である。内外面共に淡黄白色の釉が認められるが、底部は露胎である。17は試掘時出土の青磁皿である。口縁端部を削って輪花状に仕上げている。焼成は良好である。

Ⅳ　まとめ

鷹取ヒゲジロ遺跡では、大きく分けて弥生時代・古墳時代・中世の３つの時期で土地利用の痕跡が確認された。なお、明確に遺構に伴う形での出土ではないものの、試掘確認調査時及び本調査時に縄文時代後期から晩期にかけての土器や石器が出土したことから、わずかではあるが、縄文時代にける本遺跡内の土地利用の痕跡が確認される。遺跡全体をみると、各種遺構は遺跡の北側に集中しており、生活の主要な場所が示されているものと考えられる。遺跡南側から耳納山地にかけては、地形が緩やかに落ちており、生活の場所としては適当でなかったのだろう。以下では上記３つの時期に沿って各遺構群の整理をし、遺跡の評価を行う（第31図）。

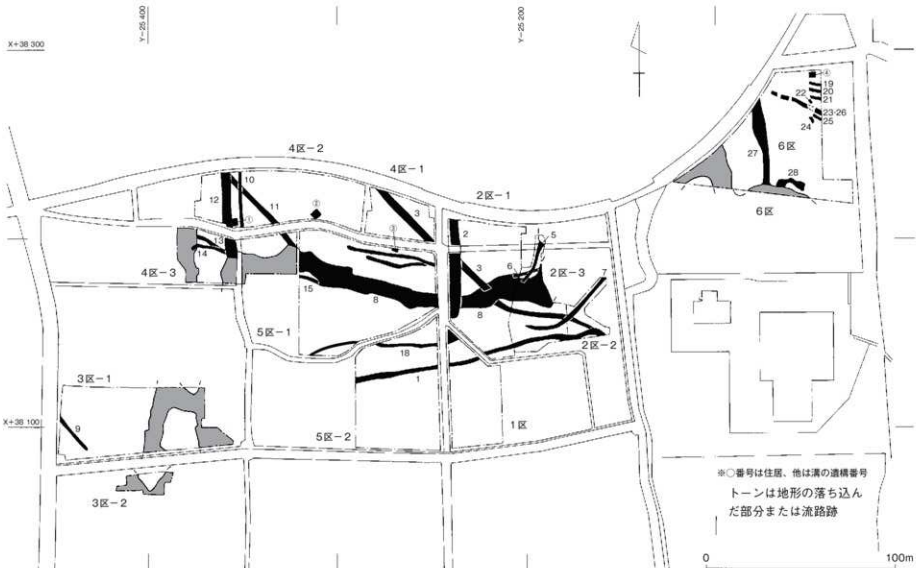
弥生時代

本遺跡では、弥生時代の明確な集落の痕跡を確認することはできなかったが、弥生時代の土器が出土したピットと数条の溝を検出した。特に６区ピット内からは弥生時代前期末頃の土器が出土した。また、1区と５区－２と２区全体にまたがって検出された１号溝、4区－１と２区－１にまたがって検出された３号溝、４区－２･３にまたがって検出された11号溝などがある。埋没時期は、１号溝･３号溝が中期初頭であり、11号溝は詳細不明である。ただし、３号溝と11号溝は長軸を北西－南東にしており、埋土もかなり近似することから、ほぼ同時期に機能し埋没したものと想定することが可能である。長軸を合わせている点は、導・排水や集落の位置に規制されて掘削されたものと推測される。このように本遺跡では、弥生時代前期末頃から中期初頭に土地利用が開始された痕跡が認められるが、弥生時代後期以降の遺構は確認できず、後世の大幅な削平によって失われている可能性が高い。また、遺跡の南東部に位置する竹重遺跡では弥生時代前期から後期にかけての竪穴住居跡等が検出されており、集落の中心部は鷹取ヒゲジロ遺跡よりも東側である可能性が考えられる。

古墳時代

本遺跡の遺構の主要な時期を占めるのは古墳時代である。後世の削平が著しかったものの、竪穴住居跡や溝など集落に関連する遺構を検出することができた。竪穴住居跡の時期は、１号住居跡が古墳時代中期、２～４号住居跡が古墳時代前期であると考えられ、中期には住居の数が減少しているように見える。田主丸地域の古墳時代中期末から後期前半は集落が衰退する時期にあたるが、本遺跡の場合においては後世の著しい削平の影響を受けている可能性も考えられる。これらの住居群の時期は全くの同時期とは言えないものの、住居同士である一定の距離を保ちながら、巨瀬川のすぐ南側に位置しており、集落における何らかの住居配置パターンや、ひいては集落内の空間構造の規則性を想定させるものである。また、各区で検出された溝の埋没時期は、５号溝が古墳時代前期、７号溝が古墳時代後期の可能性、８号溝が７世紀以降、23号溝が古墳時代中期末から後期以降であると考えられる。この中で、２区と５区－１にまたがって東西に大きく延びる８号溝は古墳時代以前より機能していた可能性が高く、長期間に亘って利用されたものと考えられる。さらに、６区で検出された時期不明の溝群は、東西に規則正しく延びている点と、23号溝と埋土が類似する点から古墳時代の所産であると考えられる。

３区で確認された粘土採掘坑と考えられる土坑群に関しては、ほとんど図示できなかったものの、遺構内から古墳時代後期から古代にかけての土器が数点出土したため、この時期よりも後世に土坑群の掘削が開始された可能性が高いと考えられる。



第 31 図　鷹取ヒゲジロ遺跡竪穴住居跡及び溝分布図（1/2,000）

中世

本遺跡では、中世の陶磁器が出土した溝や土坑群を確認した。1区と2区－1にまたがって検出された2号溝からは12～13世紀頃の土師器と褐釉陶器が出土した。また、6区27号溝埋土中から瓦器や11世紀後半以降の土師器が出土した。この2つの溝は長軸を合わせ南北にまっすぐ延びる点から考えると、条里遺構と関連する可能性が考えられる。さらに、明確に時期のわかる遺物は出土しなかったものの、4区－2で検出された10号・12号溝は長軸を南北にそろえており、2号・27号溝と共通している。中でも、規模・長軸共に非常に似通う2号溝と12号溝の距離は、東西約110mであり、条理地割の一町角の一辺の長さである109mに近似するため、条理地割の町境を示している可能性が考えられる。ただし、現在の益生田より東側（うきは市側）の田は南北に長い作りになっているように見え、益生田以西の方形区画の田とは異なる。これは、条理地割が崩れた形で残存しているものと思われるため、条理の地割の法則と現在の田の分割状況が必ずしも一致するわけではないことは注意を要する。また、27号溝は2号溝との東西距離が160mであり、2号溝や12号溝と比較すると規模が小さいので、条理地割との関連は不明である。両溝は、現在の導排水用コンクリート溝と重複するように位置していることから、当時の導排水用溝として機能していたことが推定される。

さらに、3区土坑群内より瓦器小片などが出土したことから、3区土坑群の掘削が13世紀前後頃まで行われていた可能性がある。3区の土坑群については粘土採掘坑の可能性が考えられるとしたが、条里地割の成立時期以降に繰り返し掘削・埋め戻しが行われている点からみると、条里地割内でそのような行為が行われた明確な理由を示す必要があるため、検討課題が残る。福岡県内の粘土採掘坑の類例は、小郡市の津古土取遺跡（片岡編1990）、久留米市田主丸町の松門寺A遺跡（伊﨑・今井編2002）、太宰府市大宰府政庁前面広場地区（岡寺編2010）などが挙げられる。どの例も、鷹取ヒゲジロ遺跡3区土坑群のように、不整形な円形を呈するものから切り合い関係が不明瞭なものが存在し、掘削が粘土質基盤層に達していることなど共通点が多い。これらの類例と上記の問題とを合わせて今後の検討課題としたい。

以上が鷹取ヒゲジロ遺跡の遺構の概要と変遷である。上述のように、遺跡の北側に人々の生活の痕跡が残り、南側には粘土採掘坑と考えられる遺構群が存在するのみであった。弥生時代に関しては、溝が残るのみで、詳細は不明であるが、規則的な導・排水を行っていたことがわかった。また、田主丸地域ではあまり確認されていない遺構に伴う弥生時代前期土器を検出することができた。古墳時代に関しては、巨瀬川南側の自然堤防の背後に一定のパターンのもとに竪穴住居を築き生活を営んでおり、田主丸地域の当該期の集落形成パターンの中に位置づけることができる。中世では、粘土採掘坑と考えられる土坑群を検出した。田主丸町内では松門寺A遺跡に続き2例目であり、田主丸地域の土器や瓦生産を復元するうえで重要な位置づけにある遺跡の可能性があり、今後の調査の進展によってより詳細な人間活動が明らかになることを期待したい。

参考文献
伊﨑俊秋・今井涼子編 2002『松門寺A遺跡』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第18集　福岡県教育委員会
岡寺良編 2010『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅰ』 九州歴史資料館
片岡宏二編 1990『津古土取遺跡』 小郡市文化財調査報告書第59集　小郡市教育委員会

図　　版

1　1区遠景
（東上空から）

2　1区全景（上が北）

図版２

1　1区1号土坑
（南から）

2　1区2号土坑
（南から）

3　1区3号土坑
（南東から）

1　１区１号溝（東から）

2　１区１号溝土層
（東から）

3　１区２号溝土層
（西から）

１　２区－１全景
（上が北）

２　２区－２全景及び
１・４・７号溝
（西から）

１　２区－３全景
（上が北）

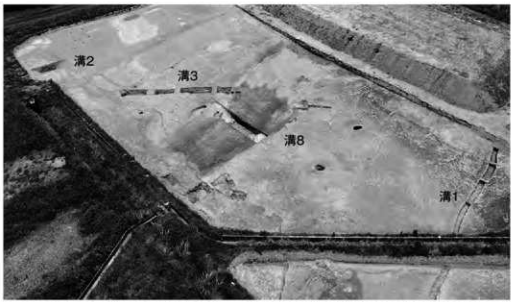
２　２区－１　４号土坑
（南から）

図版６

1　2区－1　5号土坑
（東から）

2　2区－1　6号土坑
（南から）

3　2区－1　6号土坑
土層
（南から）



1　2区－1遠景
（南西上空から）

2　2区－2
1・4号溝土層
（北西から）

3　2区－3
1号溝土層
（西から）

4　2区－1
1号溝土層
（西から）

図版８

1　２区－１
２号溝土層①
（北から）

2　２区－１
２号溝土層②
（南から）

3　２区－１
３号溝土層①
（南東から）

4　２区－１
３号溝土層②
（南東から）

1　２区－２
４号溝土層
（西から）

2　２区－３
４号溝土層
（東から）

3　２区－３
５号溝土層
（南から）

4　２区－３
５号溝　土器出土状況（東から）

図版10

1　2区－3
6号溝土層
（西から）

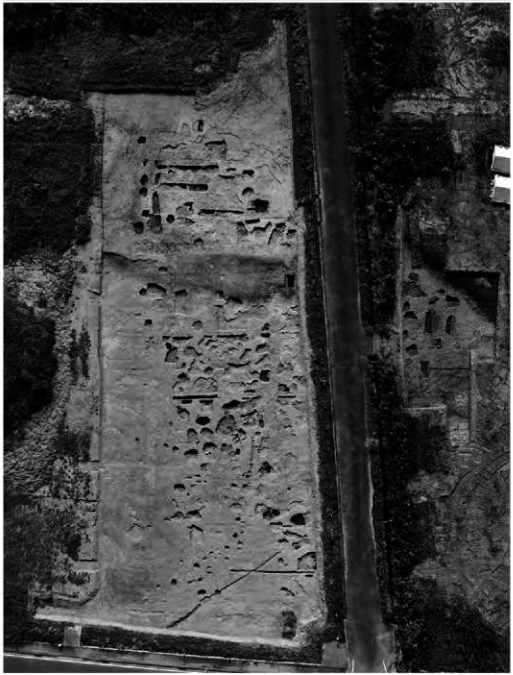
2　2区－2
7号溝土層
（南西から）

3　2区－1
8号溝土層北
（西から）

4　2区－1
8号溝土層中央
（西から）

5　2区－1
8号溝土層南
（西から）

1　3区遠景
（南上空から）



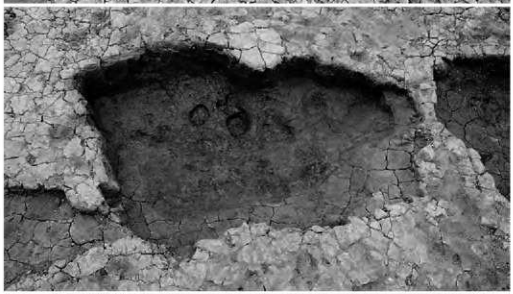
2　3区全景（上が東）

1　3区　7号土坑
（南から）

2　3区　8号土坑
（西から）

3　3区　9号土坑
（西から）

1　3区　10号土坑
（北から）

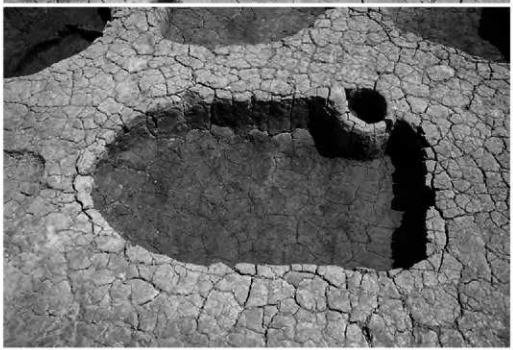


2　3区　11号土坑
（東から）

3　3区
11号土坑土層
（東から）

4　3区
12号土坑半裁状況
（南から）

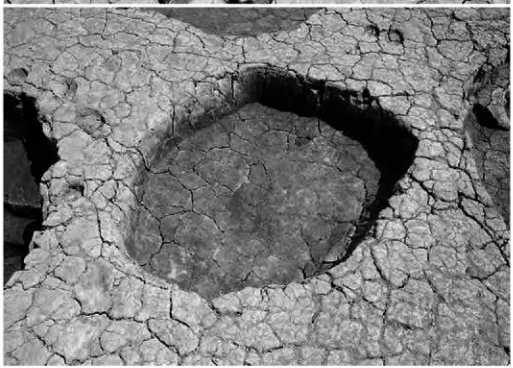
1　3区　13 号土坑
（西から）



2　3区　14 号土坑
（北から）

3　3区　15 号土坑
（西から）

1　3区　16号土坑
（西から）

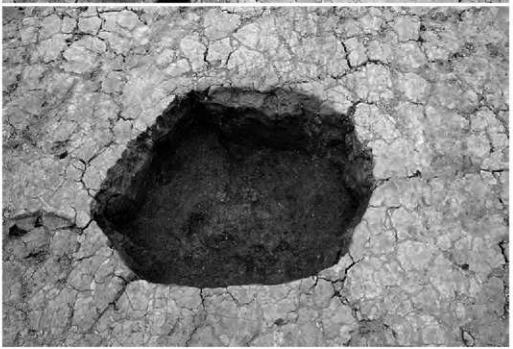


2　3区　17号土坑
（北から）

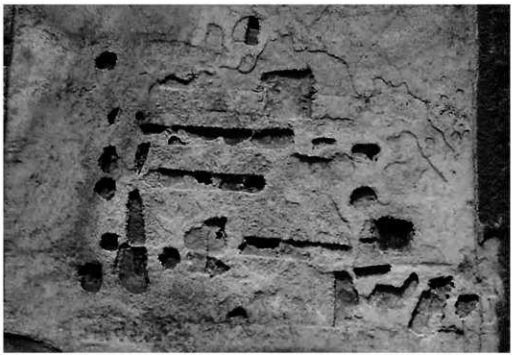
3　3区　18号土坑
（西から）

1　3区　19 号土坑
（南西から）

2　3区　20 号土坑
（西から）

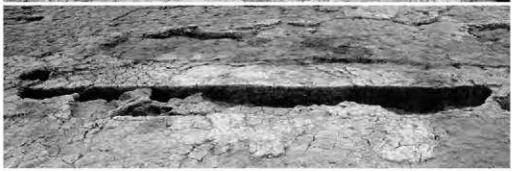


1　3区　21 号土坑
（南から）



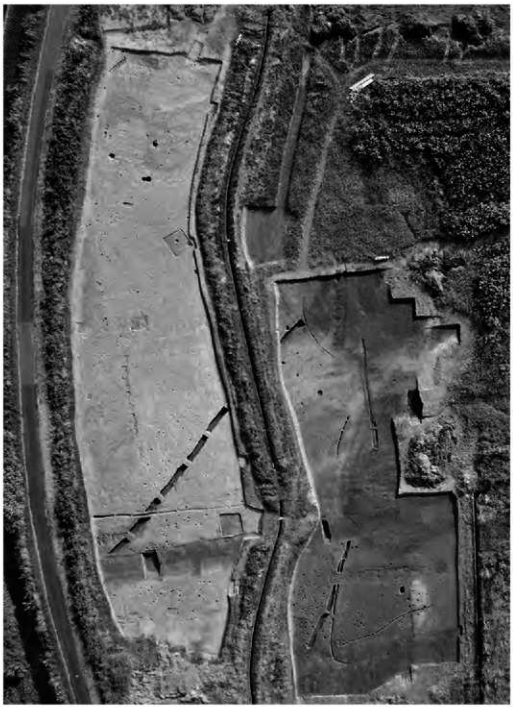
1　3区　東側土坑群
（上が西）

2　3区　東側土坑群
西トレンチ東壁土層
（西から）



3　3区　東側土坑群
東トレンチ東壁土層
（西から）

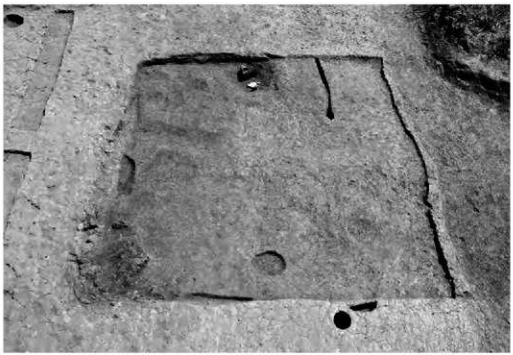
4　3区　9号溝西端
小礫出土状況
（東から）



1　4区－2・3　全景
（上が東）

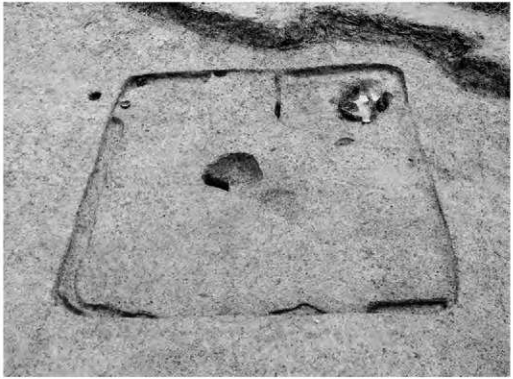
2　4区－1西側及び
3号溝
（北から）

3　4区－1東側及び
3号溝
（北東から）



1　4区－2
1号竪穴住居跡
（北から）

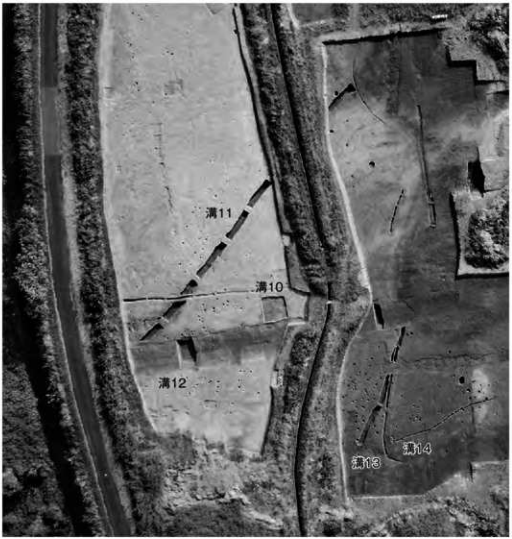
2　4区－2
1号竪穴住居跡
屋内土坑（北から）



3　4区－2
2号竪穴住居跡
（北から）

1　4区－1
3号溝土層①
（南東から）

2　4区－1　3号溝②
（南東から）



3　4区
10 ～ 14 号溝
（上が東）

1　4区－3
11 号溝土層①
（南東から）

2　4区－2
11 号溝土層②
（南東から）

3　4区－3
13・14 号溝
土層（南東から）

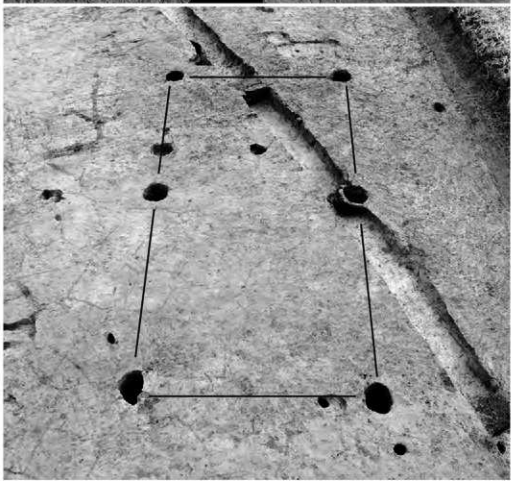
4　4区－3
12 号溝土層
（北から）

1　5区－1　全景
（上が北）

2　5区－2　全景
（上が北）

1　5区－1
3号竪穴住居跡
（南から）

2　5区－1
3号竪穴住居跡
炉跡検出状況
（南から）



3　5区－1
1号掘立柱建物跡
（西から）

図版24

1　5区－1
8・15～17号溝
（上が北）

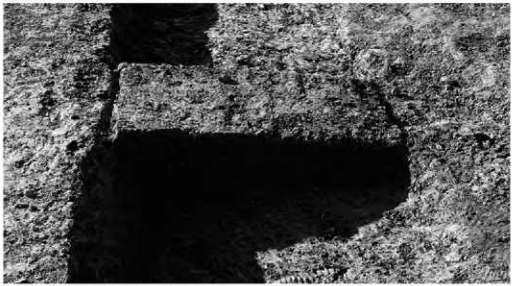
2　5区－2
1・18号溝
（上が北）

3　5区－2
1号溝土層
（東から）

4　5区－1
8号溝土層南半
（東から）

5　5区－1
8号溝土層北半
（東から）

1　5区－1
15号溝土層
（東から）



2　5区－1
16号溝土層
（東から）

3　5区－1
17号溝土層
（西から）

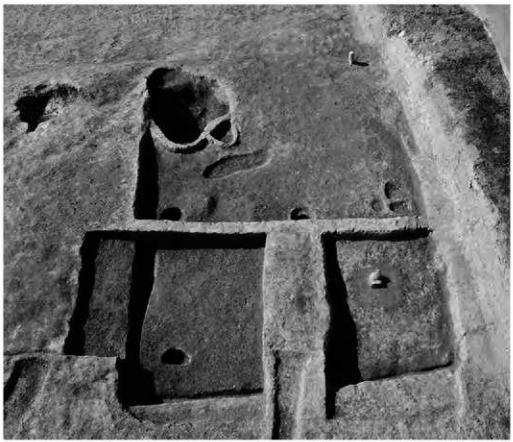
4　5区－1
18号溝土層
（西から）

図版 26

1　6区遠景
（南上空から）

2　6区全景
（上が北）

3　6区　各遺構遠景
（北西上空から）

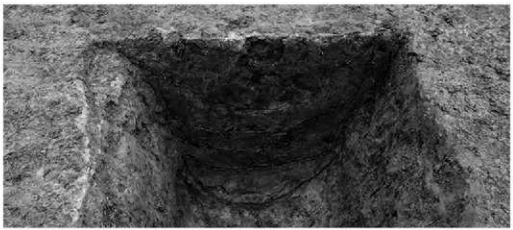


1　6区
4号竪穴住居跡
（東から）

2　6区　22号土坑
（北から）

3　6区
22号土坑土層
（南から）

図版 28



1　6区　19 号溝土層
（西から）

2　6区　20 号溝土層
（西から）

3　6区　21 号溝土層
（西から）

4　6区　22 号溝土層
（東から）

5　6区　23 号溝土層
（東から）

1　6区　24 号溝土層
（南から）

2　6区　25 号溝土層
（東から）

3　6区　26 号溝土層
（西から）

4　6区　27 号溝土層
（北から）

5　6区　28 号溝土層
（南西から）

27図−2

27図−10

27図−21

27図−22

28図−7

28図−9

28図−10

28図−13

28図－21

28図－26

29図－1

29図－3

29図－4

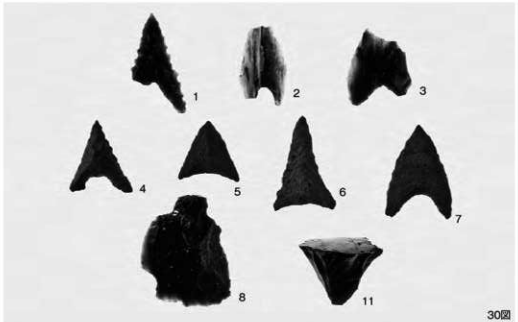
29図－5

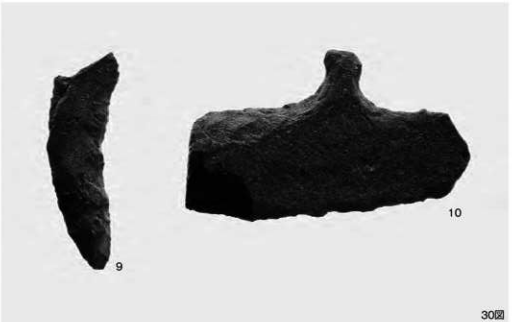
29図－7

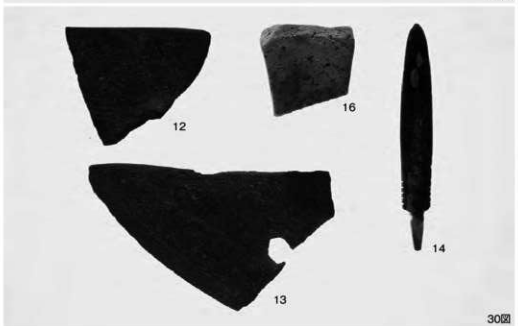
29図－11

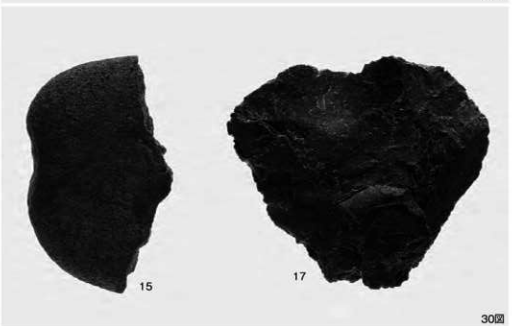
29図－13

18　19
30図









1. 出土石器①
2. 出土石器②
3. 出土石器③
4. 出土石器④

報告書抄録

ふりがな	たかとりひげじろいせき
書名	鷹取ヒゲジロ遺跡
副書名	福岡県久留米市田主丸町所在遺跡調査の報告
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	坂元雄紀　梶佐古幸謙（編集）
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒838-0106　福岡県小郡市三沢5208－3　（Tel：0942-75-9575，Fax：0942-75-7834） HP：http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/
発刊年月日	2019年（平成31年）3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たかとりひげじろいせき 鷹取ヒゲジロ遺跡	ふくおかけんくるめしたぬしまるまち 福岡県久留米市田主丸町 おおあざたかとり 大字鷹取799－1他	40-203		33° 34′ 37″	130° 72′ 80″	20170201 ～ 20180228	19,624㎡	工業用地造成

所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項
鷹取ヒゲジロ遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 中世	竪穴住居跡4棟 掘立柱建物跡1棟 土坑22基 溝28条	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・石器・土製品	粘土採掘坑と思われる土坑

要約

久留米・うきは工業用地造成事業に伴う鷹取ヒゲジロ遺跡の発掘調査では、弥生時代から中世にかけての遺構が確認され、その中で古墳時代の遺構が多く検出された。弥生時代の遺構は溝のみであり、明確な集落の痕跡を確認することはできなかった。また、竪穴住居跡4棟はすべて古墳時代のもので、巨瀬川南岸の自然堤防の背後に築かれており、古墳時代における田主丸地域の集落構成パターンの一端を表している。中世では、条理地割に沿うと思われる南北に長軸を合わせる溝や粘土の採掘坑と思われる土坑群を検出した。

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
ＪＨ	2120261
登録年度	登録番号
30	2

久留米・うきは工業用地造成事業関係埋蔵文化財調査報告

鷹取ヒゲジロ遺跡

福岡県久留米市田主丸町所在遺跡の調査

平成 31 年 3 月 31 日

発行　九州歴史資料館
〒 838-0106　福岡県小郡市三沢 5208-3

印刷　大同印刷株式会社
〒 849-0902　佐賀県佐賀市久保泉町大字上和泉 1848-20